

TAKAMIYA

松本市高宮遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1994.3

長野県松本市教育委員会

序

高宮遺跡は松本市のやや南寄りに位置します。国道19号線を挟んで東側の出川西遺跡では幾度かの調査が行なわれておりましたが、当地では本格的な発掘調査を実施したことがありませんでした。

このたび当地に土地区画整理事業が計画されたことから、松本市が高宮・征矢野土地整理組合より委託を受け、市教育委員会が事業に先立って発掘調査を実施し、文化財の保護を図るための記録保存を行なったわけです。

発掘調査は市教育委員会の委託を受けた財団法人松本市教育文化振興財団によって組織された調査団により、平成5年5月から同年12月にかけて行なわれました。作業は夏の猛暑や冬の厳寒、加えて雨季の多量な出水に悩まされましたが、参加者の皆様の御尽力により無事終了することができました。その結果、本遺跡が古墳時代中期の祭祀に関わる重要な遺跡であることが判明しました。これらの資料は遺跡の立地とともに、今後地域の歴史解明に大変役立つものになることと思います。

しかしながら開発事業に先立って行なわれる発掘調査は記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた高宮・征矢野土地地区画整理組合の方々、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

例 言

- 1 本書は平成5年5月26日～12月28日に行われた高宮遺跡（松本市高宮）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は平成5年度松本市高宮・征矢野土地区画整理事業に伴う発掘調査であり、高宮・征矢野土地整理組合より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が実施した。
- 3 本調査および本書の作成は松本市より委託を受けた財団法人松本市教育文化振興財団が行った。
- 4 本書の執筆は第1章：事務局、第2章第1節：太田守夫、同2節3村竜一、第3章第3節1.: 直井雅尚、同 2.・3.・5.: 関沢 聡、4.: 竹内靖長、その他を高桑俊雄が行った。
- 5 本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。
遺物洗浄：内澤紀代子、竹平悦子、洞沢文江
遺物保存処理・復原：五十嵐周子、内田和子、大角けさ子、中村恵子、村松恵美子、百瀬二三子、
倉科祥恵、堤加代子、渡辺よし子
遺物実測：大城よしの、竹原久子、平出貴史、MIN AUNG THWE、松尾明恵、関沢 聡、望月
映、吉沢克彦
遺構図整理：丸山恵子、矢崎寛子
トレース：上條尚美、竹原久子、松尾明恵、関沢 聡
図版作成：小松正子、村山牧枝、林 和子、中村恵子、百瀬二三子
写真撮影：市川 温（遺構）、宮島洋一、竹原 学（遺物）
編集：高桑俊雄、三村竜一
- 6 発掘現場での測量の基準点の設置並びに遺構写真測量は術写真測図研究所に実施して頂いた。
- 7 本書で使用した遺構名の省略語は次の通りである。
土器集中区→土集、竪穴住居址→住、土坑→坑、ピット→P、トレンチ→T
- 8 図・文中の方位については磁北を用いた。
- 9 本調査で得られた出土遺物・記録類は松本市教育委員会が保管している。

目 次

序	
例言	
目次	
挿図目次	
図版目次	
第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第2章 遺跡の環境	
第1節 地形と地質	3
第2節 周辺遺跡	5
第3章 調査結果	
第1節 調査の概要	6
第2節 遺構	
1. 流路・土器集中区	7
2. 竪穴住居址	10
3. 土坑・ピット・合口土器棺	12
第3節 遺物	
1. 土器	13
2. 石製品・ガラス製品・土製品	20
3. 石器	24
4. 木製品	24
5. 鉄製品	25
第4章 調査のまとめ	29

挿 図 目 次

挿図1	調査地の位置と範囲	2
挿図2	2-A地層断面・2-B7号トレンチ土層	4
挿図3	調査地の位置と周辺遺跡	5
挿図4	遺構配置	6
挿図5	高宮遺跡古墳時代中期土師器器種分類一覧	19

図 版 目 次

図版1	第1号土器集中区	図版16	土器(1)
図版2	第1号土器集中区遺物出土模式図		}
図版3	第2号土器集中区	図版55	土器(40)
図版4	第3号土器集中区	図版56	土器(40)・木製品
図版5	第4・5号土器集中区	図版57	ミニチュア土器(1)
図版6	第6号土器集中区	図版58	ミニチュア土器(2)
図版7	第7号土器集中区	図版59	石製品(1)・ガラス製品
図版8	第8・15号土器集中区	図版60	石製品(2)・土製品(1)
図版9	第9号土器集中区	図版61	土製品(2)
図版10	第10号土器集中区	図版62	土製品(3)・石器
図版11	第11～14号土器集中区	図版63	鉄製品(1)
図版12	第1・2号住居址	図版64	鉄製品(2)
図版13	第3号住居址	図版65	鉄製品(3)
図版14	土坑(1)		
図版15	土坑(2)・ピット・合口土器棺		

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

近年、松本市南部では大型店の進出による商業開発をはじめ、人口増加に伴う宅地造成などが進み、その町並みは変貌しつつある。なかでも南松本駅周辺の開発にはめざましいものがある。

今回、国道19号線の西側、高宮・征矢野地区に区画整理事業が計画された。この事業対象地に周知の高宮遺跡がかかっていたことから、埋蔵文化財保護の必要が生じた。そこで松本市教育委員会と(財)松本市開発公社、区画整理組合が保護協議を重ねた結果、遺跡の破壊がやむなきに至ったため、事業前に緊急発掘調査を行ない、記録保存という形で遺跡保護を図ることとなった。その委託契約は平成5年5月6日付けで松本市と高宮・征矢野地区土地区画整理組合との間で締結された。

松本市教育委員会では発掘調査業務を(財)松本市教育文化振興財団に委託し、松本市立考古博物館が発掘調査を実施する運びとなった。

第2節 調査体制

調査団長 守屋立秋（松本市教育長）

調査担当者 竹内靖長、高桑俊雄、市川温（考古博物館）

調査員 太田守夫、竹原久子、松尾明恵、望月映

協力者 青木雅志、浅井信典、石井脩二、今井勝治、臼井秀明、内澤紀代子、小穴仁美、大谷成嘉、大谷房夫、大月八十喜、上條尚美、神田栄次、倉科祥恵、興喜義、小島茂高、兒玉春紀、小松正子、斉藤政雄、坂口ふみ代、瀬川長廣、高山一恵、田口吉重、竹平悦子、田多井亙、堤加代子、鶴川登、寺島直哉、中島新嗣、中村恵子、中村安雄、藤本利子、洞沢文江、松田秀子、丸山久司、丸山恵子、三沢元太郎、道浦久美子、宮島利治、宮下治枝、村山牧枝、斐園成、望月利男、百瀬二三子、百瀬正彦、百瀬義友、森井柳三郎、矢崎寛子、吉田勝、米山禎興、渡辺よし子

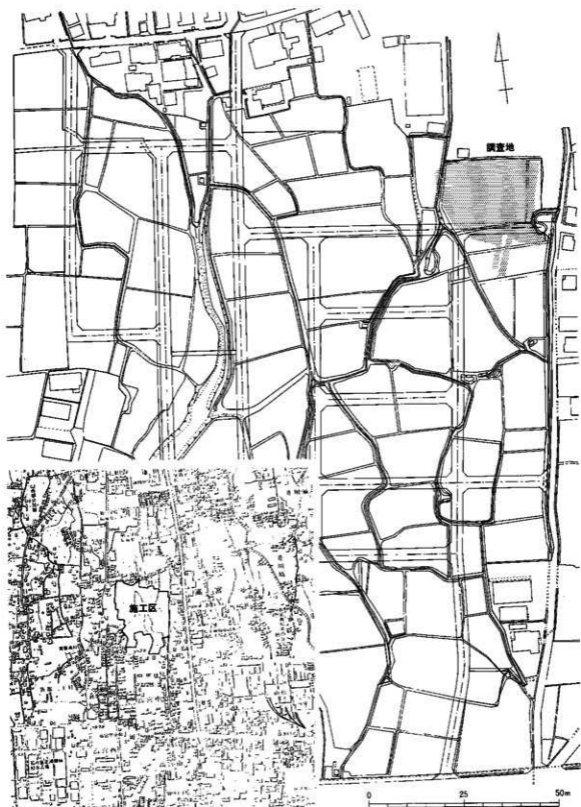
事務局

市教育委員会：島村昌代（社会教育課長）、木下雅文（課長補佐）、窪田雅之（主任）

(財)松本市教育文化振興財団

事務局：大池光（事務局長）、牟禮弘（局次長）、青木孝文（次長補佐）

考古博物館：熊谷康治（館長）、松澤憲一（主任）、木下守、久保田剛（主事）、遠藤守（事務員）、藤原美智子



挿図1 調査地の位置と範囲

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

1. 位置と地形

本調査地は、松本市高宮北、国道19号線の街路西側の残された水田地域にある。この付近一帯は第2次世界大戦前後までは、湧水に恵まれ、水利のよい稲作地域であり、冬の裏作も行われていた。その後国道19号線の開通に伴い、にわかには都市化し、自然地形の展望は困難になった。

地形上は松本市に流入する諸河川の複合による、沖積扇状地性堆積や三角州性の堆積の南西端の一部で、現在は主として奈良井川・鎮川の影響を受けている。西の奈良井川、東の田川の現河床との距離は、それぞれ西へ1,500m・南西（はん濫口）へ2,000m、東へ1,500m・南東（はん濫口）へ1,650mである。地形面は北北東へ極めて緩く傾斜（5/1000）し、地下水位が高く、多くの湧水口が見られる扇端に当たり（細粒堆積物0～5m）、最扇端の沼沢性の堆積（細粒堆積物5～10m）へ200～300mでせまる。

湧水口は発掘地周辺だけで10を超え、排水溝も存在していたという。現在発掘地の南30mに2つ（径2m×深1.5m）、南西20mに（径3m×深1.5m）、西20mに湛水池（ヨシの群生）が見られる。実際にこの発掘地も夏季、湧水による湛水で作業を一時中断した。ただしこの湧水は夏季だけで、乾季に当たる他の季節には湧出は止まり乾田化する。水源は上流からの浅層の伏流水と見られ、夏季は溜田状となり暗渠排水や排水路に苦勞するという。従って、夏季だけの溜田となるため、腐植は植物の遺体としては残らない。現在上流域での水田の減少、深井戸の普及で減水し、灌漑には深井戸揚水にかえている。

2. 地層と堆積

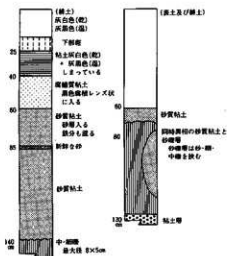
この地域の堆積層は奈良井川（中・古生層系統）による砂質土・砂質粘土と、径10×5cm前後の大礫を含む中・細礫層からなる。礫の種類は砂岩・粘板岩・チャート・けい岩が混じる。流れと堆積の方向は、上流域の北東流と異なり、南南東から北又は北西へ向かって蛇行し、下流域の性格を示す。その結果、蛇行の流れによる砂質土層、砂礫層、流路跡が地表下に見られる。発掘地内でも60cm程の表土（耕土とその関連）の下に、砂質土層、砂礫層それぞれを主とした地層（挿図2-A）や、北西へ蛇行する流路跡が見られる。これを横断面図にしたのが挿図2-Bである。発掘地内では砂質土層は北東部・南部に厚く、砂礫の堆積は流路跡と見られる中央部から北西部にかけて多く見られる。遺物遺跡の検出面は、表土（耕土とその関連）の下の砂質粘土層（深さ60cm）で、一部流れ（深さ135cm）の砂礫面からも出土している。

堆積の状況を見ると、表層（耕土との関連）は灰白色（ぬれると灰黒色）の砂質粘土で、下部に鉄分の沈澱や腐植の混入があり、検出面との間は腐植を含んだ黒灰色土となる。検出面以下の砂質粘土層と砂礫層の堆積は同時異相と考えられ、深さ70～120cmでは両層の接触面に相互併入があったり、礫層中に土・砂の層を挟んでいる。下部砂礫層（深さ140cm以下、中・細礫）は、地層断面によると同じ深さに砂質粘土層が介在するので、まだ同時異相の中と見られる。しかし湧水口（深さ1.5m以上）の噴出砂礫から見ると、この深さに透水性の砂礫層（広がりや連続性をもつ基底礫岩）が考えられる。従って下部砂礫層には基底礫層とつながるものもあり、また噴出砂礫により上・下砂礫層のつながりも考えられる。

発掘地中央には幅約20mの北西流へ向かう流路があり、ここに砂礫層が集中し、砂礫までの深さが浅くなっていることは前に述べた。この流路の南～南西隅に、深さ135cm、N-40°-W、N-20°-W、N-40°-Wと蛇行する幅20cmほどの溝（流れか）があり、底の砂礫層上に土器・土器片が見つかった。砂礫層の上には15cmの土層、さらに15cmの砂層がレンズ状に載り、全体は砂質土に覆われていた。滞水性の堆積状況は、遺跡と同時に掘りかかれた溝か緩やかな流れと考えられる。

3. 地形の形式と遺跡

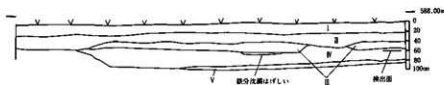
住居址・遺構の載る砂質粘土や砂礫は、同時異相の堆積層で、基底礫層（湧水の透水層）の上に、



挿図2-A 地層断面

扇状地末端の蛇行性の流れによって形成されたものである。遺跡はこの層の固化を待って立地し、また前記の溝（流れ）も固化した層内に形成されたものである。その後多くの湧水口により滞水性の地域が変わったが、遺跡の立地した当時は気象的な減水期か、地形変化による低湿地面積の縮小かによって、生活域になりえたと考えられる。この状態は1989年の出川南遺跡の発掘でも見られた。

- I : 黄灰色土
- II : 鉄分沈澱(黄灰色土塊入り)黄灰色土
- III : 黒灰色土
- IV : 鉄分沈澱砂質灰白色土
- V : 砂質灰白色土



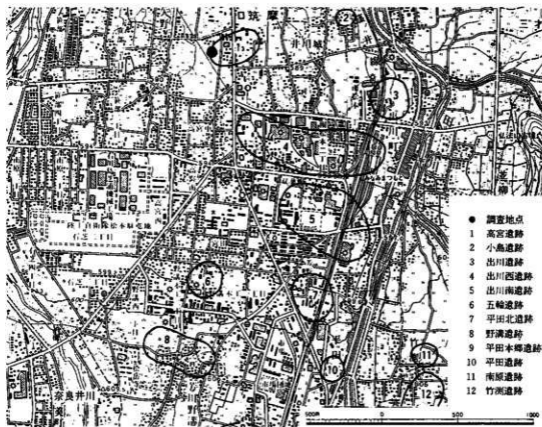
挿図2-B 7号トレンチ土層

第2節 周辺遺跡

高宮遺跡の周辺には原始・古代・中世にかけて多数の遺跡が分布している。ここでは今迄周辺で実施された発掘調査から、古墳時代の成果に限って簡単に述べてみたい。

古墳時代の主な成果は本遺跡から南にある出川、出川西、出川南、平田北、平田本郷の各遺跡で得られている。本遺跡南隣の出川西遺跡（S61・H5年）は、試掘から集落址の存在が知られていたが、前期（4世紀代）の配石墓等が確認された。出川西遺跡に隣接する出川南遺跡では4次に亘る調査（S61・63・H1・3年）が行われ、4次には後期の住居址113軒、同時期と考えられる掘立柱建物址21軒等が確認された。現時点での後期の集落規模としては松本平最大であり、注目されている。更に南の平田北遺跡では立会い調査（H6年）で後期の竪穴住居址、掘立柱建物址等を確認している。その他では土器片を得た遺跡に前期の出川、中期の平田本郷がある。墳墓は出川南遺跡の4次調査時に平田里古墳群（1～3号古墳）が発見された。1号古墳は5世紀後半～6世紀初頭の築造で、周溝から得た多量の円筒埴輪・形象埴輪と馬具等は県内でも重要な資料である。

以上の様に周辺での調査例は少ないが、地域の古代史は今後の資料の蓄積により解明されよう。



挿図3 調査地の位置と周辺遺跡

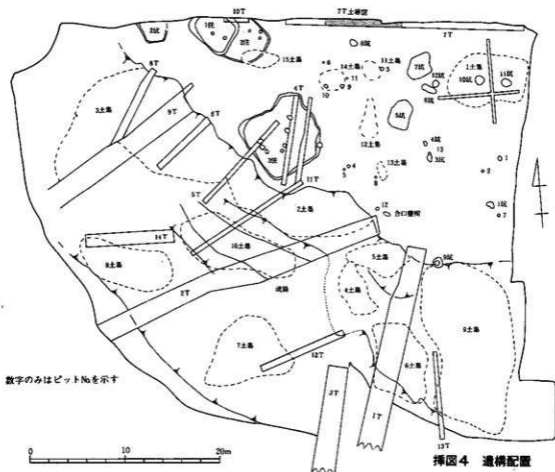
第3章 調査結果

第1節 調査の概要

調査は5/26~12/28に亘って実施した。まず重機で区画整理事業地全体に試掘を行うが、結果は北東部を除き出土物は皆無であった。この為、範囲を限定し調査区とした。夏は異常多雨と出水に悩まされ、一部地区を冬の調査にゆだねた。実質調査面積は1,032.4m²である。

調査遺構は住居址3軒、土坑12、ピット13基。また大きな流路の内外には特に多量の土器が出土する15ヶ所を土器集中区とした。他に合口土器棺1もある。

出土遺物には、土器に土師器の高杯、小形丸底埴を中心に壺、甕、杯等、石製品には白玉を中心に勾玉、管玉、算盤玉、ガラス小玉などの玉類が多く、鉄器を見ると鉄錐、鉄剣、刀子、鎌などがあり、すべて5世紀半ばの所産である。特に1号土器集中区には5×8mの狭い範囲に約400個以上の土器類がぎっしりとうず高くなる程集まり、土洗いにより、5000個以上の玉類の他、土製の玉鏡、木製の櫛等が出土した。県内でも珍しい古墳時代中期の祭祀の原型がそのまま出現している。



第2節 遺構

1. 流路・土器集中区

(1)流路

調査地南端から南西、北西にかけて幅20～30m、長さ60m以上の溝を本址とした。これは自然流路である。覆土は場所により微妙に違うが、粘質ないしやや砂質の暗灰色土で、鉄分が沈澱している。この為土色は一見斑状に見え、又、所によってはどぶ臭い匂いもする。流路岸は遺構のある北東部側で砂質土となり、出入りが激しく、南西部では礫層となり弧を描く。これは南西側は高く、北東部側で流路が岸（壁）を侵されていたことを示す。流路の底も砂質土あるいは礫層となり、大きな起伏がある。ちなみに、2号トレンチ（2T）を見ると、流底までは10号土器集中区の部分で地表下1.8m、検出面より約30cm程の堆積量である。土層を見ると砂礫層が多量の砂質土に挟まれ、一時期水流があったことを示している。又、4号土器集中区部分では底の礫が高くなっていた。このような状態の為、各土器集中区のあり方も斜面にある2・3・6号、流底の5・10号、中洲の4号、浅い流底の7～9号と分けられるようである。尚、出水期には6・9号土器集中区の周辺より多量の湧水があり、北西方向へ流れていく様子がわかった。

遺物には後に触れる2～10号土器集中区の土器類の他、土錘が26点出土した。これらは半分を欠する2点の他は完形ないしほぼ完形のもので、18点はひとつかたまりとなり、他の8点もそのまわりにあった。10号土器集中区の北東部に位置するが、その高さには土錘以外に何もなく、故意に流路中程であるここへ置いたものと思われる。

(2)土器集中区

土器集中区（以下「○号土集」と略す）は流路の中と、住居址・土坑などがある微高地にみられる。後者には土器のほか玉類、鉄器などを重なる程に密度濃く置いた状態のままの1号土集と、狭い範囲にまとまった11～15号土集がある。流路の中には斜面上に位置する2・3・6号土集、流底にある5・10号土集、中洲にある4号土集などが遺物の密度が濃い。他の7～9号土集は広いところに散発的な遺物出土である。ここでは上のような出土場所による土集毎にみてゆく。

①第1号土器集中区（図版1・2）

用地内北東部に位置する。南北5m、東西8m程の範囲から極めて多量の土器が出土した。それらは周囲の遺構検出面より高い所から出土し始め、中央部では溝高くなるというような重なり様であり、1㎡で約50個体を取り上げた箇所もある。周囲に土層の変化はなく、東西・南北にトレンチを入れてみても落込らしき土層の変化は全く見えない。平坦地へ祭祀したままの遺物である。

土器は図化できたもので計348点ある。このうち、高杯 129点・小形丸底壺96点が特に多い。高杯は杯部が自然に脚部から離れてしまっているが、脚部は正位のまま、あるいはやや斜めになりながら出土するものが多く、又、その脚部を押さえるように周囲に小型丸底壺・埴などがあり、それらの体部も残りが良い。甕・壺などの大型のものは分散して正位で胴部中程まで埋められた様なものも目につく。ミニチュア土器は中央部には少なく、外側近くに多い。発掘時には逆位で出土したものが圧倒的に多い。このように土器は特定の器種が一ヶ所に集められたような跡はないが、特定の器種の置き方に特徴がある。石製品・ガラス製品は8種ある。特に小形の白玉が多く、土を水洗いで拾い得たもので5,300点を数える。石製品分布図で見ると白玉の多出地点と他の玉類の出土とは一致していない。又、鉄器も多く、鉄鍔52点、次いで刀子15点など不明品9点を除き4種87点である。これらは取り上げた区画毎に複数の器種が揃っている様子が見られる。尚、唯一の土製鏡・土製勾玉が出土している。

②第2・3・6号土器集中区（図版3・4・6）

これらは流路内の斜面に位置している。2・3号土集は東の微高地側にあり、流路岸に添って南北に遺物が連続しているが、都合上2つの地区としたものである。特に3住の南側に当たる2号土集では、土器はドロと化した粘質暗灰色土中にあり、岸側から除々に西へ低く位置している。これらを取り上げると、その下から更に東から西へと深く出土するというように土器が土の中に層をなしていた。これらの土器の個々を見ると、割れながらもひとまとまりになって出土し、残存状況の良いものでもその有様は正・逆位という様な規則性はなく、水流に影響を受けた為か各方向に転倒したものが見られる。又、土器接合図を見ると3号土集よりも2号土集の方が広く飛散し、投入して破損したか、あるいは破損したものを投入したかの様子を見せる。

これに対し、6号土集の様相はちょっと異なる。ここは浅くなった中洲状の所が南方へ再び深くなるところである。2号土集程密度は濃くないが、各々の土器は正位に置いたものか、ブロンと横になったものか、割れていても小破し、狭い範囲に散る。そのような中に653がある。これは高杯の杯部のみで、まず傘大の石5個が平坦になるように放射状に置かれ、そこへ正位に据えられていた。又、この杯内部にはワラ状のものをドーナツ状に丸め、丁寧に敷かれていた。まさに上部に何かを乗せ供える様にしてである。

遺物は2号が1号に次いで多く、土器には高杯56点の他に各器種があり、甌2点、石・ガラス製品も5種28点、砥石、木製の漆塗りの櫛もみえる。又、3号の土器90点も多い。石製品の白玉の他砥石、鉄器に刀子・鎌がある。

③第4号土器集中区（図版5）

4号は流路内中洲（浅瀬）に位置する。すぐ北に5号土集があるが、両者には50cm程の高低差が

ある。土器は41点のうち高杯が28点と目立って多い。それらは場所柄他の土集のように泥の中ではなく、礫層の上にあって出土した。個々の土器は破損程度が大きく、飛散しても居る。

遺物は土器の他に白玉・勾玉が計5点得られている。

④第5・10号土器集中区 (図版5・10)

これらは流底に位置する。5号土集は岸に近い場所のいわば中段の所にあり、10号土集の場所は流路中央の最深部に当たる。前者は葦やヨシのような太い稲科植物の炭化材を多量に含む粘質灰色土中に、土器が密度濃く狭い範囲にまとまる。個々の破損程度は大きいながら、接合可能なものが多い。これに比べ10号土集は土器の量少なく、破損品が多く、又、接合できるものも少ない。これらの土器は前の(1)流路でも触れたように、後の水流により、埋没している様子がうかがえる。その点この横にある2・3号土集よりはすこし時期的に先行する土集と云えよう。

遺物を見ると、5号で54点の土器、白玉、鉄鍔各1点など、10号からは小形丸底壺13点を含む38点の土器の他、勾玉、白玉各1点がある。

⑤第7・8・9号土器集中区 (図版7～9)

いずれも流路内に位置する。南西部には7・8号土集、南東部に9号土集がある。土器は粘質灰色土中にあるが、僅かで浅い流底に達する。7・8号土集は粘質土層中に土器がある。これらは広い所に少数個体が散在する。甕・壺など大型のものが正、あるいは逆位に出土するが、これを中心に他の土器も集まっている様子はない。9号土集は高杯・小型丸底壺などの小形土器類が広く散在している。これらはほとんど砂礫層上にあり、近くには湧水箇所が多い。個々の遺物は大破しているものが多く、又他の土集に比べ、復元可能なものも少ない。これらからの土器はそれぞれ、21点(7)、11点(8)、28点(9)である。

⑥第11～15号土器集中区 (図版8・11)

これらは微高地に位置する。規模は80×200cmの13号土集がもっとも小さく、大きな15号土集でも4.0×1.8m程の広さで1号土集の半分程度の大きさである。土器は検出面に僅か現れ、当初はこれらを土坑としてとらえようと試みたが落ち込みが判然とせず、僅かな窺みの中に入っているものと理解し、その土器出土範囲をもって集中区とした。他の土集に比べ個々の土器は小破片が多く、接合可能なものも少ない。置いたというより、壊れたものを投棄した感じが強い。遺物は土器のみであり11・13号より各2点、12号より6点、14号からもっとも多く10点であった。又、15号土集は2号住の覆土中に存在し、2号住居址埋没後のものである。

2. 竪穴住居址

①第1号住居址 (図版12)

調査地北部に位置する。南東側に2号住居址を壊し、北側の一部は用地外となる為調査できなかった。ここで見ると遺構は地表下50cmに埋没している事がよく分かる。覆土は遺構内外ともによく似た砂質土で遺構内側が僅か黒い。規模は約5.2×4.1mで、隅丸方形を呈し、長軸方向はN-49°-Wを指す。覆土中層以下には多量の炭化材が焼土塊と共に遺存していた。炭化材は直径5~10cm程で、長さ1m程のものもあり、ところどころに炭化したワラ状のものも見る事ができる。これらは中央部に低く、周囲に高く位置し、放射状に広がっており、あたかも住居址構造材が焼け落ちたような感じである。床面は炭化材と焼土の下の薄い間層下にあるが、堅さはない。中央寄りにある34×29×9cmのP₁は内部が焼土で埋まっており、炉址と思われる。ピットは他にP₂(43×34×13cm)がある。壁高は四方とも30cm前後を測る。北西側が緩やかで他は急な傾斜を呈している。

遺物は多く、土器に遺存状況の良いものがある。特に放射状に広がる炭化材の北西、空白部にはまとまってかなり浅い所より827-829・832・839が正位で、824・831・834・838が逆位で出土している。これらは高杯、小形丸底壺、壺、甕などの小破もしくは完形に近いもので、北西部、北東部などの覆土中層以下より出土するものとは個々の遺存状態にも隔たりがある。つまり、土器は時期的には差がないものの、住居址(廃絶時)に伴う遺物に対して、前者は住居址の中央部分で、しかも炭化材より上層部に位置し、更に個々の出土状態を考えると住居址を焼失(却)した後に故意にこれらの土器を置いた様子を見せている。又、土器以外の遺物には鉄器に小形の刀子1点が床面近くから出土、白玉1点もある。

②第2号住居址 (図版12)

1住、15号土集と重複して検出した。両者より古い時期となる。北側は一部用地外となり、遺構は恐らく総面積の6割程を調査できたものと思われる。覆土は砂質灰色土で周囲の土と良く似ており判然とせず、何本もサブトレンチを入れようやくプランを確認できた。平面形は概ね胴張り方形を呈するようで、規模は4.9×4.0m以上を測り、長軸方向はN-58°-Wを示す。床面は中央部の辺りが褐色土塊混入砂質灰色土で、鉄分を沈澱させた為硬く残っており、良好。壁際には堅さはなく、砂礫層となる。南側隅には床面上に葦のような植物が炭化して遺存し、焼土塊も少し残っているが1住のように炭化した木材片は見当らない。ピットはP₁(32×29×9cm)、P₂(35×30×9cm)、P₃(51×44×8cm)、P₄(36×?×11cm)の4ヶが北東寄りに偏って位置するが、この中に炉・柱穴にふさわしいものは見当たらない。又、この周囲には青灰色の粘土が床面上に残されており、不純物を含むものではあるが総量20kg程はあった。壁高は北西側は不明であるが、他の三方は30cm程の高さを測る。

遺物は1・3住ほど多くはなく、特に中央部にはごく少ない。覆土中層~床面にかけて割合に遺

存状況の良いものも存在する。南西壁際の甕2点(851・853)、北東壁際の847・849の小形丸底壺などがそれらである。又、850の壺はP₃内より出土している。他には高杯・直口壺など総量9個を図示し得た。尚、土洗いの際に青緑色ガラス製小玉が1点見つかった。

③第3号住居址(図版13)

本址は1・2住の南側、流路に近い所で、流路内には2・3号土集が近接する。覆土中には暗渠・溝・方形落込などがあるが、いずれも後世の新しいものである。不整形を呈し、規模は7.35×7.68mを測り、1・2住よりもかなり大きい。覆土は検出面周囲よりやや黒い砂質の暗灰色土で、比較的明瞭である。床面は自然堆積の礫面が露出するか、或いは砂質の灰色土となっているが、堅さはなく、床面に緩やかな起伏がある。壁は西側で高さ10cmを測る。他は三方とも非常に緩やかな傾斜を示し、いわゆるガラガラ状態の壁である。ピットは西側に割と深いP₁(68×58×22cm)、P₄(65×57×24cm)とP₅(48×40×15cm)、中央には南北にP₂(63×45cm)、P₃(48×40cm)、P₆(51×40cm)、P₇(40×39cm)が並び、又、東隅にP₈(60×53×14cm)がある。このようにP₁・P₄は床面より20cm以上深いが、P₂・P₃・P₆・P₇では2~4cmとごく浅く、柱穴・炉などは考えられない。

遺物は多くないが、土器の他、石器、鉄器がある。これらは出土する場所が限定しており、西壁寄り中央部のピットが3基ある周辺と東壁添いの所である。土器のうちでは、まず高杯が8点と多く、小形丸底壺3、短頸壺2、杯・壺各1点が図示できた。石器はP₄内から出土する有孔砥石2点は、ここからだけのものである。又、大型の砥石2点の他本遺跡唯一の鎌・鋤が、いずれも西壁際より得られている。

3. 土坑・ピット・合口土器棺

(1)土坑 (図版14・15)

土坑は12基である。ここでは大形の落ち込みを土坑とした。これらの周辺にある11～15号土器集中区は落ち込み不明瞭で判然としなかったが、土坑は比較的土層が分かりやすい。大形不定形の5・7坑の規模は308×214cm(5)・351×240cm(7)で、深さ10～12cm、北側は用地外となる2坑もこのようなものにならうか。いずれも底面は堅さが見られない。これらからの遺物は割に多く、7坑からは甗を含め9点もの土器が出土する。又、5坑からは土器の他、鎌も1点得ている。2坑からの4点の土器も多い方である。

1・3・4坑は長軸80cm以下の小型不定形のものである。やはり浅いが20cm(1)程の深いものもある。遺物は小片のみで復元図化できるものはない。

中型の土坑は直径約60～100cmの8～12坑と65×160cm楕円形の6坑がある。その深さは9坑を除き8cm程までと非常に浅く、又、壁面も傾斜が緩い。深さ66cmある9坑は9号土器集中区北側に位置し、半分は流路にかかっている。埋土の様子が他のものとは異なり、黒色土・灰色土のブロックが入り、人為的に土を埋めている。内部からは土器片が数点得られたのみで、遺物に特徴は見られない。又、10・11坑は1号土器集中区の下部に出現した。上部土器集中区と重ねてみると、遺物はこの土坑の際に配し(置い)たように見えなくもない(図版14)。土器はまわりの上部からのものが本址内にも入っている様子で、その点この浅い落ち込みは1号土器集中区と一体と見なした方が良いかも知れない。尚、このような訳で10・11号土坑からの白玉は計100点以上になる。又、12坑からも2点の土器が図示できた。

(2)ピット (図版15)

13基のピットはどれも小型で、26×21cm(P6)から59×38cm(P1)までの規模をもち、僅か窪む程のものが多い。遺物を見るとP1・P13から各々小形丸底壺・杯を出している程度である。重複関係をみると、14号土器集中区範囲内にそれより新しいP9・P10があり、又、3号土坑に切られるP13があるが、時期的には他のものと差異のないものであろう。

(3)合口土器棺 (図版15)

微高地南側の流路近くに合口土器棺がある。2個の壺形土器はやや小型の南側の壺の口縁から頸部を欠き、北側の壺の中へ差し入れる様に合わせて37×82cmのピットの中へ置いている。この土器棺は長軸N-45°-Wを指し、内部は土で一杯であった。尚、この土を現場で水洗いして細かく見てはみたが、骨片・玉類などは皆無であった。

第3節 遺物

1. 土器

1 方法

出土土器の報告の第一の目的は、どこから（出土地点）、どのような状態で（出土状況）、どのくらい（出土量）、どの時代のどの種類の土器（土器の属性）が、出土したかを示すことにある。次に、遺跡・遺構における土器組成、形式変化、編年などを論じていくことになるが、これによって遺構や遺跡の年代観、廃絶の背景、ひいては遺跡や地域を覆う土器様式とその変化などを探ることが可能になる。しかし、それは既に考察的な内容を多分に含むといつてよい。

本書では、出土地点、出土状況については遺構の項で触れることとし、ここでは土器の属性と遺跡・遺構における組成を中心に述べたい。

ところで、第一の目的のなかで出土量についての記述は、いまだに一定した方向が見出せずにいる。図化提示できなかったものも含めて総重量や或はそれを基にして総個体数として示す方法は、計量作業が膨大な上に、多量に残る土器細片を器種・器形に判定していく困難が伴う。先学の業績でも、図化提示した数を単純に出土量に置き換えてしまう錯覚は根強く、故に出土量の提示内容についての具体的な検討が語られないまま、それを用いた土器組成論、様式論に入っていくという例が多く見られた。今後、さらに考慮されるべきところであろう。

本書でも、出土量の問題は理想的な解答を出せていない。量が膨大なため計量等に及ぶ時間的ゆとりを持たなかったことが原因だが、解決方針自体が定まっていないことも大いに影響する。従って、今回は実測数を以て出土量の器種器形別、遺構別の相対化を図る従来通りの方法に依らざるを得なかった。ただし、口縁、頸部、底部等が残存する個体は徹底して図化に努めたので、小形品実測数の器種器形構成比率はかなり正確な数値になっていると考えている。

2 弥生時代の土器（図版56）

数点の破片が自然流路の底付近から出土した。特に第10号土器集中区付近に集中するが遺構に直接伴うものとは考えられない。6点を図化及び拓影で提示できた。

1は「コ」の字重ね紋の小形甕の頸部口縁部である。口縁部には縄紋地紋の上に棒状工具による山形沈線が走り、胴部に「コ」の字重ね紋がみられる。内面は横のミガキである。3は縄紋地紋に棒状工具による2段の崩れた山形沈線が描かれる壺の頸部から胴部上半付近。2・4～6は壺の破片拓影で、2はわずかに受け口の口縁と端部に細かい波状紋が走り、他は胴部に雑な波状紋が施されている。

提示土器の時期は、1～3が弥生時代中期末の栗林式最終段階又は百瀬式に、他は中期末から後期に属すると考える。

3 古墳時代の土器

出土土器の内、ほんの僅かな例外を除いたすべてはいわゆる古墳時代中期に属するものである。種別は須恵器が2片混じる他は、多数のミニチュアを含む土師器に限られる。量は整理用コンテナ一で115箱、重さにして約570kgに及ぶ。

(1) 器種・器形 (第2表)

①概要

土師器の器種(形式)は、高杯類、杯・鉢、小形の壺類、埴類、甕、壺に大別される。細別分類の基準内容と代表例は第2表と挿図5に一覧を掲げた。また各器種・器形に該当する土器番号の一覧を第3表に示した。土師器全体で数的に主体を占めるのは、高杯A・B、小形丸底壺である。重量的には壺、甕も多いが、復元、実測できた数はずっと少ない。

②主な器種の特徴と問題

a 高杯

最も多数出土した器種の一つで、なかでも高杯Aと高杯Bがほとんどを占める。高杯Dはどれにも属さないものをまとめたので、数は少なく、高杯Aの小形品(135)とした方がよかったものもある。第1号土器集中区の134のように脚端部が内湾するものは極めて特殊である。

高杯Aと高杯Bは共に同一器形間で個体の大きさにかなりの差異がある。第1号土器集中区で口径を知り得た高杯54点での口径の度数分布は次のとおりである。(単位 上:cm 下:個体)

～	12～	13～	14～	15～	16～	17～	18～	19～	20～	21～	22～	23～	24～
9.9	12.9	13.9	14.9	15.9	16.9	17.9	18.9	19.9	20.9	21.9	22.9	23.9	24.9
1	1	1	5	2	11	10	13	4	3	1	0	1	1

口径9.9cm以下は特殊としても、12cmから24cmまで実に2倍の開きがある。定型化した器種の中でこの偏差は大いに注目に値しよう。度数は18cm台に最大のピークがあるが、14cm台と23cm以上にも小さなピークがある。3つのピークを以て大・中・小形に分類できよう。また、高杯Bの脚部の大きさを比較すると口径の傾向にほぼ比例する。この個体間の大小の格差は製作上の規格の規制が緩んでいたためというより、さまざまな大きさのものを必要に応じて作り使い分けていたためと考える。ただし、たとえば第1号土器集中区の出土地点にこの大小が対応しているかどうかは問題であらう。

次に、高杯A、高杯Bを問わず、小孔が脚部中位に穿たれたものが散見される。孔は1孔に限られ、焼成後穿孔で直径5mm前後と小さい。貫通しているものと窪み状になっている2者がある。祭祀用の仮器としての意味を示すものであろうか。しかし、集落遺跡出土の高杯にも同様例が認められる点(松本市山影遺跡)はさらに検討が必要である。

赤彩は僅かに認められる(37・831)のみで非常に特殊なものと考えられる。

b 小形丸底壺

高杯に匹敵する数量が出土した。しかし、規格は口径が5～8cmの範囲に分布し、高杯ほど個体間の差異はみられない。ただし、器形と調整では大きな異なりを見せる。体部が球形を呈し丁寧なミガキで仕上げられている精製品があるのに対し、平らな底部をそのまま残して菱形に近い歪んだ体部にミガキをまったく有さない非精製品も多い。口縁部も長さがまちまちで、内湾するもの、頸部付近に僅かな稜を持つものすらある。この現象は時間差、又は同一器種の中の細分形式として捉えることもできるが、出土状況からみて明らかな時間差を設けることは不可能で、細分形式についても無意味なほど細かく多くなり、しかも効果があるとも思えない。むしろ、このばらつきのは大半は本器種の範型の緩みに起因する成形、調整の乱れと考えたい。すなわち、本遺跡の時代における小形丸底壺は、すでに一つの器種として末期的な様相を呈していると想定する。或は、特殊な用途のために多数が濫造されたためとの見方も不可能ではないが、高杯に技術的な乱れがまったくなくことと対照的で、その点からすれば前者の見解に蓋然性がある。

c 増・直口壺

増は基本的に小形丸底壺の大形のものだが、体部がやや扁平で頸部がしまるものと、より頸部が広く、口縁部が短いものの2種に分けられる。この2者は系譜を異にしている可能性が高い。すなわち前者は初期須恵器の甕や直口壺と、後者は前代からの土師器の直口壺との関連を考えたい。前者の方に丁寧なミガキが行われる傾向も、このように考えれば頷ける。

直口壺は、取えて分類して残したが、口縁が若干長いだけで後者の増との共通点が多い。また、238や241等の口縁が折り返されるものは、同様の口縁形態を壺Cと分類しており、底部の形状こそ異なるが、むしろこちらとの近縁性を考えた方がよいかもしれない。

赤彩は増に2点(799・829)確認されているのみである。特殊なものと考えたい。

d 短頸壺・無頸壺

いずれも杯Aの端部の屈曲がくびれた頸部となり、体部が深くなった形状に近い。従って、壺とは呼称したが杯の仲間として扱った方が適切かもしれない。丁寧なミガキが行われる点でも杯Aと一致する。ただし、短頸壺は小形の甕の丸底のものにも形状が類似し、この間の区分が正しいかは疑問としたい。この甕の中には、ミガキがみられないために甕としたが、短頸壺に含めた方がよかったものもある。

e 壺

口縁が二重に外反するものを壺A、口縁の上段が立ち上がるものを基本的に壺Bとしたが、この壺Bの中で、口縁上段が外開しながら立ち上がる壺B2には壺Aとの境界線が引きにくいものがある。最終的に口縁端部の反り具合で分けたが、判然としているかは問題である。壺B2が壺Aから形式変化したものと理解すれば納得できるが、この見解は現段階では保留しておきたい。壺Cの小形のものには、前述のとおり増と分類したものと通ずる個体がある。壺B3の特徴的なものは外来

系の變の可能性も残しておきたい。

f 變・小形變

大形、中形の變は、底部を意図的にケズリで丸底化しているものと、そうでないもので、變Aと變Bに分けられたが、丸底化が不完全な個体はどちらかの判定に苦慮する。

問題は小形變で、この時期にはまだ定型化しておらず、単に變の小形のものと言う他はない。器形も一定せず、埴に近い球形の胴部や、縦長の胴部に平底を持つものなどが見られる。一応、小形變という呼称で一括したが、變との区分や埴などとの分別で問題を残す。

g 須恵器 (図版56)

2点の器種は、把手付碗と直口壺である。把手付碗の把手は僅かしか残存していないが、板状のものになると思われる。いずれも初期須恵器の範疇で捉えられるものであろう。

h ミニチュア (図版57・58)

71点が図化提示できている。出土地点は第1号土器集中区が圧倒的に多く61点、第2号が3点、第10号が1点、第14号が4点、検出面が2点となっている。形態は、基本的に杯Aを模したもの(19・20・22・62等)、杯B(3・4・10・43・44等)、小形丸底壺(25~27・60・64等)の3種類があると思われる。

(2)土器群

①概要

第4表は、図化提示できた各遺構に帰属する土器の番号及び器種器形別の数量である。これらの遺構出土土器群の中で、第1~6・10号土器集中区、第1号住居址出土土器の計8つの土器群は一括遺物として非常に良好な出土状況を示している。また、土器群間で層位的な前後関係が明確に確認できたのは、第8号土器集中区(新)と第10号土器集中区(古)、及び第1号住居址(新)と第2号住居址(古)の間の2つである。ただし明確な型式差は把握できなかった。

器種組成については、今回は徹底した図化を行ったので、壺・變を除く小形品(高杯、小形器台、杯、鉢、無頸壺、短頸壺、直口縁壺、小形丸底壺、埴、臚を指す。以下同じ)は、各遺構において実測数から導かれる器種器形数の構成比率と、出土総量における同比率とが近似すると考える。ただし、壺・變類は小形品に比べて復元できる比率が低く、単純な比較はむずかしい。ちなみに図化した小形品の器種別構成比率は、高杯54.7%、小形丸底壺28.6%、杯4.5%、埴4.5%、短頸壺2.5%、臚1.8%、小形器台1.4%、直口壺0.9%、鉢0.7%、無頸壺0.4%となり、高杯類、埴類、杯類の比率は約14:9:2となる。

②特徴的な土器群

a 第1号土器集中区出土土器 (図版16~29 1~348)

土師器の高杯、杯、小形丸底壺、埴、臚、壺などと、ごく僅かの須恵器で構成される。土師

器は実測できただけでも計348個体という膨大なものである。

本土器群は出土状況からみて、意図的に、同時に配置・配列された可能性が極めて高い、いわゆる廃棄の同時性を有する非常に良好な一括遺物である。個体数が多い点から統計処理で有意の数値を導くことができ、器種組成を論じる上でまたとない資料となった。

小形品各器種の構成比率は、高杯48.1%、小形丸底壺35.8%、埴8.2%、杯3.0%、短頸壺2.2%、甕1.5%、小形器台、無頸壺、直口壺が各0.4%という数字が導かれる。すなわち、高杯類と埴類、杯類（短頸壺、無頸壺を含む）の比は48.5:45.9:5.6となる。この比率は祭祀という限られた場での器種組成（土器様式）を示し、凡地方的な本時期の土器様式と相同であるとするには問題がある。

b 第2号・第3号土器集中区出土土器（図版30～40 349～546）

第2号土器集中区は108個体、第3号土器集中区は90個体の土器が図化提示できた。便宜的に2遺構に分けてあるが、自然流路の北岸傾斜面の広い範囲に、連続して崩れ落ちるように完形や大破片の土器が集中していた。この出土状態からみて短期間に廃棄された一括性の高い土器群と考えられる。

両者を合わせた小形品各器種の構成比率は、59.4%、小形丸底壺28.1%、小形器台と埴が各3.1%、杯2.5%、短頸壺と甕が各1.3%、鉢と直口壺が各0.6%を示す。高杯類と埴類、杯類の比は62.5:33.1:4.4となり、第1号土器集中区に比べて高杯の比重が高い。また壺・変類の量が少ない。

c 第4号・第6号土器集中区出土土器（図版40～42 547～587）・（図版44～46 642～681）

第4号土器集中区は41個体、第6号土器集中区は40個体の土器が図化提示できた。いずれも自然流路の中の小さな高まりの上のごく狭い範囲に完形やそれに準ずる土器が集められていた。同時に意図的に納置されたと推定される良好な一括遺物である。

第4号土器集中区の小形品各器種の構成比率は、高杯73.8%、小形丸底壺13.2%、小形器台、杯、直口壺、埴、甕がそれぞれ2.6%、第6号土器集中区の間比率は、高杯62.2%、小形丸底壺21.6%、杯10.8%、短頸壺と埴が各2.7%となり、前3者に比べてさらに高杯の構成比率が高くなる。また壺・変類が少ない。

d 第5号土器集中区出土土器（図版42～44 588～641）

54個体が図化提示できた。自然流路の北岸の傾斜に添って土器が集積されていた状況は第2号・第3号土器集中区と同様だが、集中の度合いが高く、それらとは区分される。良好な一括遺物と認めることができる。

小形品各器種の構成比率は、高杯60.9%、杯23.9%、小形丸底壺13.0%、鉢と甕が各6.5%、短頸壺と埴が各4.3%、直口壺2.1%となり、杯類の構成比率が高く、他の土器集中区と大きな違いをみせる。この違いは他の土器群との時期差又は土器集中の目的（祭祀）の異なるためと推定される。より新しい器種組成を示していると理解することも可能だが、型式上では代表的な器種に明確な時間差を読み取ることはできない。

● 第10号土器集中区出土土器 (図版50・51 742～779)

計38個体が図化提示できた。自然流路の底部にあたり、第8号土器集中区の下部に間層を挟んで存在した極めて一括性の高い土器群である。

小形品各器種の構成比率は、高杯51.4%、小形丸底壺35.1%、小形器台、無頸壺、埴、甕がそれぞれ2.7%となり、高杯と小形丸底壺を中心とした組成となっている。壺、甕類は非常に少ない。

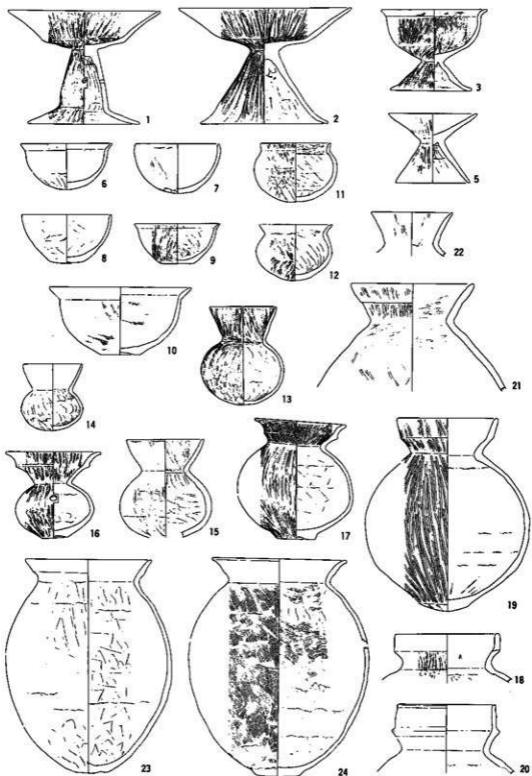
f 第1号住居址出土土器 (図版52・53 818～844)

いわゆる焼失住居からまとまって出土した良好な一括遺物で、各個体の残存状態も良い。計27個体が図化提示できている。小形品の器種構成は高杯54.5%、小形丸底壺36.4%、短頸壺9.1%である。本土器群は住居址出土品であり、祭祀と推定される土器集中区とは性格を異にしているはずだが、組成は類似する。杯類をまったく欠く点に注目したい。

③祭祀と土器群

第1号土器集中区と同様の状況を示した遺跡を県下の例で拾うと、長野市駒沢新町遺跡1号祭祀遺構(昭和41年調査)、中野市新井大ロフ遺跡(昭和44年調査)がある。駒沢例は高杯と埴・小形丸底土器の組成が本例と逆転しているが、杯が少ない点は同じで、基本的に類似の時期・性格を持った土器群と考えられる。大ロフ例は高杯が最多であることは同じだが、杯類が埴・小形丸底壺を圧倒的に凌駕しており、この違いは決定的である。赤彩の出現頻度もずっと多く、祭祀の性格の違いによるものとも見えるが、高杯Aに脚部稜の不明瞭化、短脚化などが窺われ、杯部内面の黒色処理も発生している点から類推すると、時期的に若干下るために現れた違いとも解釈できる。

古墳時代中期以降の祭祀土器群としては、近年、各地で古墳周溝内にまとめられたものが発見されている。松本平でも、松本市向畑11・12号古墳、針塚古墳、平田里1号古墳、大町市中桑原4号古墳などを挙げるができる。伴出した須恵器の編年観に従えば、向畑11号、針塚、平田里1号、中桑原4号の順になるが、高杯を中心に杯・埴・甕を伴う組成から高杯と杯の組み合わせに変わっていく。ただし、本例に近似する時期にあるとみられる向畑例でも小形丸底壺は皆無で、古墳周溝内祭祀は基本的に小形丸底壺を伴わないものであったことが、本例を媒介として読み取ることができる。



挿圖5 高宮遺跡古墳時代中期土師器器種分類一覽

2. 石製品・ガラス製品・土製品 (図版59～62、第5～7表)

土器集中区1を中心に祭祀関係の遺物と考えられる石製品・ガラス製品・土製品が出土している。これらの種類別・遺構別の出土状況は下表のとおりである。

第1表 石製品・ガラス製品・土製品の遺構別出土一覧

種類 遺構	勾 玉	管 玉	白 玉		丸 玉	算 盤 玉	ガ ラ ス 小 玉	剣 模 造 形 品	双 円 孔 盤	土 勾 製 玉	土 製 鏡	不 土 製 明 品	土 鍔
			完 形	破 片									
土集1	16	9	5166	134	1	4	9	9	4	1	1		
土集2	4	2	18				2	2				1	
土集3			11										
土集4	3		2										
土集5			1										
土集10	1		1										
1 住			1										
2 住							1						
10 坑		1	89	2									
11 坑			28										
流 路													26
排 土		1	12										
総 計	24	13	5329	136	1	4	12	11	4	1	1	1	26

(1)石製品 (図版59・60) 勾玉・管玉・白玉・丸玉・算盤玉・剣形模造品・双円孔盤が出土している。
 勾 玉 (1～24) 24点が出土している。これらは平面形態・横断面の厚さから2種に分類できる。
 A 種 (6・9～16・23) 一般に勾玉形の石製模造品とされるものである。横断面は偏平であり、側面と背・腹面の間に明瞭な稜が研ぎ出されている。研磨は後述するB種と比較して粗く、器面の線状痕は明瞭に観察することができる。頭・尻部の側面はなだらかな曲線を描かずに、隣接する研磨面の稜によって多角形を呈しているものが多い。このために平面形の個体差は大きい。

大きさは大小のばらつき(＝個体差)が認められるが、9-10と14-15はほぼ同規格のものである。なお、11・16・23は頭・尻部の腹側の研磨面が平行していることから、頭・尻部は同時に研磨されたと推定される。腹部はC字形を呈するものが多い。孔は片面穿孔と推定される。なお、14では最初の穿孔場所が腹部側に寄りすぎたことから、途中で穿孔を中止して、背部側に若干ずらして貫通穿孔が行われている(実側図の右面)。

B 種 (1・5・7・8・17~22・24) 胴部の横断面が丸みを帯びたもので、古墳に副葬される装身具としての勾玉と同種のものである。研磨は丁寧に施されているため、A種のような明瞭な稜は形成されない(17は除く)。また、線状痕は観察しにくく、研磨の方向は特定できないものが多い。本種は大形の1・2・17・24と小形の3・5・7・8・18~22がある。大形品は滑石製の1・2と緑色凝灰岩製の17・24があるが、後者の研磨は特に丁寧に施されている。なお、17は例外的に頭部と腹部の境に明瞭な稜が研ぎ出されている。これは内磨き砥石による腹部の研磨が最終段階に行われたために生じたものである。小形品は胴部が比較的偏平であり、7・8・22はA種に近い形態を呈している。定形的なものも多く、4-7-8・19-20・21-22は同規格のものである。

穿孔方法については2・21・22が孔軸がまっすぐに通らない点で両面穿孔と推定される。また、17・24は両面の孔径に明瞭な大小の差があり、確実に片面穿孔と特定できるものである。その他については孔軸がまっすぐである点、孔内に段差が認められない点、頭部の厚さが3~10mmと薄いことから、片面穿孔と推定したい。なお、両面の孔径がほぼ同大の勾玉については、長い錐で片面穿孔されたと考えられるほか、細通しが良くなるよう孔径を大きくするため片面穿孔後に反対側からも錐が通された可能性も考えられよう。

管 玉 (25~37) 13点が出土している。石材は黒~暗灰色を呈する滑石(5点)と淡緑~灰緑色を呈する緑色凝灰岩(8点)が使用されている。すべて細身の小形品で、長さ15.40~26.95mm、直径3.45~5.55mmの範囲内にある。研磨は丁寧に施されており、側面に稜は観察されない。穿孔方法の特定は難しいが、両端の孔径がほぼ同じであることから両面穿孔か、片面穿孔の後に反対側から孔径を大きくする修正穿孔が施されたかのどちらかと推定される。

白 玉 完形品5329点(接合によりほぼ復元できた8点を含む)、破片136点が見つかった。このうち100点余りが出土地点を測量することができただけで、残りはすべて水洗選別の過程で見つかったものである。なお、遺物の取り上げから整理段階までに紛失した白玉が4点以上(G7グリッド1点、C7グリッド3点以上)あるので、実際の点数はさらに多くなる。

石材は滑石と鉄石英が使用されているが、後者は3点だけである。色調は多様であり、黒~暗灰色の暗色系、褐~淡白橙色の褐色系、赤色(鉄石英)等がある。

形態は管玉を短く輪切りにしたような円筒形を呈し、高さが直径よりも小さいものが大半を占めている。端部は研磨されて平坦面を有するものと、切断されたままのもの、折り取られたような凹凸のあるものが認められる。側面の研磨は丁寧に施されており、その方向は孔軸に対して右上がりのものがほとんどである。これは製作者の利き手と工具(砥石)の使用法に関わる現象と考えられる。本遺跡の白玉は研磨方法の違いによって2種に分類することができる。

A種: 円柱状を呈するもので、側面は1方向の直線的な研磨が行われている。

B種: 側面に孔軸にほぼ直交する稜線があり、この部分が最大径となるため胴張りの円柱状を呈するものである。本種については下記の1~4の特徴がある。

1. 稜線はシャープさを欠いた鈍いものが多い。
2. 稜線が全周しないもの、稜線が端面に平行せずうねりがあるものがある（稜線がほぼ全周するほど明瞭なものは274点確認できた。このほかに部分的に稜線があるもの、断続する稜線があるものなどが多く存在している。）
3. 稜線の位置は必ずしも中央になく、片側に寄るものも多く存在する。
4. 研磨の方向は稜線を境に方向が変わることはほとんどなく、同一方向で行われている。

以上のことから、定形的でなく、また最大径部分と両端面の直径の差がほとんどないB種は、後述する算盤玉とは明確に異なるものである。側面の稜は定形的な算盤玉の製作を意図して研ぎ出されたものではなく、側面の研磨法の違いによってA・B種の違いが生じたものと考えたい。これは研磨の方向が稜線の部分を境に変わることがない点で、側面の研磨がA種では孔軸に平行して直線的に行われたのに対して、B種では湾曲した動きで砥石が使用されたことが推測されるからである。このB種が製作工人の癖であるのか、白玉の側面に丸みを作ることを指向したものかは今後の課題である。

丸玉 (38) 緑色凝灰岩製で、白玉とは石材・大きさの点で明瞭に異なることから、1点だけではあるが区別して扱った。孔は片面穿孔である。風化により軟質化し、研磨痕等は観察できない。
算盤玉 (39~42) 39~41は滑石製で、胴部中央の最大径となる部分の稜は後述する42と比較して鈍い。両端の孔径はほぼ同大であるが、片面穿孔と推定される。42は淡緑~灰白色を呈する緑色凝灰岩製で、片面穿孔である。

剣形模造品 (54~64) 調査時に剣形模造品として12点が取り上げられているが、確実に特定できるものは11点である。石材は滑石・片岩類が多用されている。5cm以上の大形品(54~56)、3~4cmの小形品(57~64)がある。形態的には片面の中央に鑷をもつもの(54・56・57・59~61・64)ともたないもの(55・58・62・63)がある。頭部の孔は58が両面穿孔であるほかは片面穿孔である。鑷をもつタイプは、頭部(孔の周辺)が厚さを減ずる研磨で研ぎ出されるため、Y字形の稜線が形成されている。頭部は円または山形に成形されているものが大半であるが、62・63は直線的である。研磨痕は明瞭に観察することができるが、その方向は一定していない。側面はすべて研磨によって面取りされている。なお、62は下半分が破損した後、破損部分に研磨が施されている。

図示していない1点は片面に礫の自然面(表皮)をもつ横長剥片で、自然面の部分に敲打痕、側面の一部に研磨によって面取りされた部分が観察される。剥片の大ききから剣形模造品の未製品の可能性が考えられるが、祭祀遺構からの出土である点を考慮すれば別種の可能性も考えられる。

双孔円盤 (65~68) 4点が出土している。石材はいずれも石墨絹雲母片岩で、光沢のある灰白色と淡緑色の縞模様を観察される。平面が不整形を呈する円盤に、片面穿孔によって孔が2箇所にあけられている。研磨の方向は同一個体の中で複数の方向をもつものがあり、一定性はない。側面の研磨は表・裏面に対して粗雑である。

(2)ガラス製品 (43~53) 小玉が12点出土し、このうち11点を図示している。色調は青・淡緑色系のものが多い。透明感のある52以外は、両側の孔の周囲に平坦面が観察される。この平坦面は特に、45・49・51の青色系の小玉が顕著である。また、比較的透明な小玉ではガラス内部に気泡筋や気泡列が観察される。

(3)土製品 (図版60~62) 土製模造品が3点、土鍾が26点出土している。

土製模造品 (69~71) 69は平面が「く」字状を呈する勾玉である。胎土には石英・長石が含まれている。器面は赤褐色を呈し、指頭圧痕の後にナデ調整が施されている。断面は不整な円形を呈するが、頭部はつまみ出されて厚みが減じている。孔は片面穿孔である。

70は鏡で、長径3.17cm、短径2.05cmの不整な楕円形を呈している。胎土に石英・長石を含み、器面は暗灰~赤褐色を呈し、指頭圧痕の後にナデ調整が施されている。裏面の紐は大きく山形につまみ出され、紐孔は片側から穿孔された後、再度逆側から補助穿孔が行われている。

71は直径5.4mmの棒状を呈する不明土製品である。片側が破損しており、全体の形状や規模は不明である。胎土に石英・長石を含み、器面は赤褐色を呈する。僅かに湾曲し、外側は曲げる際に生じたヒビ割れが観察される。

土 鍾 (72~97) 自然流路内から26点が出土している。72~87、88~97がそれぞれ一括で出土している。このうち86・87が約1/2を破損しているだけで、他は完形または先端部付近が僅かに破損しているだけの良好な資料である。

大きさは長54.6~70.1 (平均62.3)mm、最大径17.7~22.7 (平均20.0)mm、重量15.75~29.10 (平均22.3)gで、規格性が比較的高いと考えられる。形態的には中央に最大径があり、両端が僅かに減幅するため、紡錘形を呈するものが多い。端部は平坦面が作り出された75・76・79・80・92・93・97とそうでないものがある。器面には指頭圧痕とナデが施されているほか、植物(種子・茎等)の圧痕が一部で観察された。なお、ナデは長軸方向に施されているものが大半である。

色調は暗灰~灰褐色系(72~74、81、83~87、89、95、96)と淡黄褐色系(75~80、82、88、90~94、97)の2種があり、前者は直径・孔径が大きいとともに、器面に指頭圧痕を残しているものが多い。いっぽう後者は前者に比べて細身で孔径が小さく、器面には丁寧なナデ調整が施されているものが多い。胎土はいずれも1~2mmの砂粒を含むが、4mmの石英を含む82、5mm程度の小礫を含む85などもある。焼成はいずれも良好である。

製作方法については破損品が少ないため不明な点もあるが、孔内に長軸に平行する条痕が認められることから、片側からの刺突穿孔か、芯棒に粘土を巻き付けて成形した後に棒を引き抜いたものと推定される。なお、孔が扁平な楕円形を呈するもの(78・80・85・92・97)があり、穿孔後に両端を先細にする調整が施されたものと推定される。なお、特徴的なものに90がある。これは端部を細くするために、両手で土鍾の両端を持って逆方向に捻りを加えて成形している。この成形痕はそ

の後に行われるナデ調整で消されてしまう性質のもので、他の土錘で同様の手法が用いられた可能性も考えられよう(80・92がその可能性がある)。

3. 石器 (図版62、第8表)

砥石(98～102)が6点出土し、このうち5点を図化・提示している。98・99は携帯用の有孔砥石である。98は黒色を呈する粘板岩製で、端部が僅かに破損しているだけのほぼ完形品である。側面が僅かに湾曲した直方体を呈するが、孔から下側は良く使い込まれている厚みが減じている。孔は片面穿孔後に反対側から修正穿孔が施されている。上端に別の穿孔痕が観察されることから、狭長な有孔砥石が破損した後に、再度穿孔が行われたものである。99は頁岩製であるが、被熱によって灰～灰白色に変色している。長側辺が大きく破損しているが、残存部から長側辺も砥面として使用されていたことが窺える。砥面は全面に認められるが、両面穿孔された孔の周辺は礫の自然面(表皮)をそのまま砥面としている。なお、図示していないが、裏面には孔の下側と下部端に穿孔を行うとした穿孔途申痕が観察される。

100は偏平・大形の珪質凝灰岩礫を素材としたもので、上半と片側の一部を破損している。砥面は両面に観察される。片面は全面に砥面が認められるのに対し、他面は一部だけである。101は偏平な砂岩礫を素材にしたものと推定されるが、片側辺の大半を破損している。砥面には線状痕が観察されるが、その方向は一定していない。なお、破損部を含めた器面に鉄分の集積が観察される。102は比較的偏平な凝灰岩礫を素材としている。両側面は面取りされているが、他の部分は礫の自然面をそのまま砥面としている。砥面は面取りされた側面と上・下面に認められる。側面は左側がよく研がれて平滑になっているのに対し、右側は面取りして成形した際の工具痕が観察される。この面取りは上・下側から行われており、ノミなどの鉄製工具で削られた幅狭の面を観察することができる。また、上面の研磨はよく行われているが、裏面はそれほどではなく礫の自然面を良く残している。

4. 木製品 (図版56)

第2号土器集中区より整帯1点が出土した。歯部を欠き、黒漆の漆膜の一面も一部を除き剥落している。残存部分は、高さ4.1cm、幅5.6cmを測る。本体は腐朽しているが、漆膜に原構造をよく印している。細い竹ヒゴ状のものを並べて束ね、中央を糸状の物でくくり、そこを中心にU字形に曲げて歯を作ったと思われる。竹ヒゴは残存部分で22本確認されるため、歯部は44本以上ということになる。歯部の基には、くくり付けてあったと思われる糸か木質部の痕跡が僅かにみられる。

5. 鉄製品 (図版63～65)

住居址・土器集中区・土坑から破片にして293点の鉄製品が出土している。特に、土器集中区1からの出土品が大半を占めており、祭祀との関連が想定される。器種別には鎌、剣、刀子、鎌、鍬(・鋤)が認められるほか、器種を特定できない鉄器(「不明鉄製品」として記述)がある。

鉄製品は古墳時代の自然流路に接した遺構から出土している点に加えて、現在も地下水位が高い環境下であったため、錆ぶくれの大きいもの、芯鉄が無くなったが錆と土が固着したためかろうじて原形が推定できるものなどが大半を占めている。そのため、実測掲載できたのは僅かに74点だけである。以下では、器種別に鉄製品の概要を記すことにする。

鎌 (1～32) 鎌として識別できたものは58点あり、このうち32点を図示している。以下では、鎌身部の形態別に述べていく。

圭頭鑿形式 鎌身断面は両丸ないし平造りで、逆刺や関は認められない。鎌身部の長さから、4 cm前後の大形品 (1)、3 cm前後の中形品 (25・30)、2 cm前後の小形品 (4・13・23) に細分される。このうち全形を復元できるものは少なく、23では全長6.0cmを計り、錆ぶくれの厚い13は全長8 cm前後と推定される。また、大形の1は寛被～基部を破損しているが残存長10.7cmを計る。寛被～基部は錆のため不明瞭なものが多いが、4・23は関寛被と1.4cm前後の短い基部が観察される。なお、鎌身の先端部を破損しているが、10・17は本類に属するものと推定される。

三角形式1類 鎌身断面は平造りで、横長の三角形を呈する。錆ぶくれで不明瞭ではあるが重袂の逆刺を有すると推定される。寛被・基部は破損により不明である (24)。なお、中期に属する向畑第11号古墳 (松本市) からはほぼ同形の重袂の鎌が出土している¹¹⁾。向畑例では鎌身中央に一孔を有し、短い基部が鎌身から直接伸びている。

三角形式2類 縁辺部の破損が著しいが、鎌身断面は平造りで、関を含めた平面形は菱形を呈すると推定される。鎌身部と比較して細身の寛被部は3.0cmを計り、関寛被から下の基部は1.6cmが残存している (2)。

長三角形式1類 鎌身断面は平造りで、脇袂を有する。寛被部はなく、鎌身部から1.0cm前後の短い基部が伸びている。鎌身の大きさと側辺のあり方から、鎌身長が5 cm前後で側辺が丸みを帯びる (14・15・20・31) と、鎌身長が6 cm前後で側辺が直線的なもの (27) に細分される。なお、31は同種の中でも脇袂が深く、また、基部が長い点で14・15・20とは別種の可能性がある。

長三角形式2類 鎌身断面は平造りで、鋭利で深い脇袂を有する。鎌身長は推定4 cm前後で、側辺は直線的である。錆ぶくれが厚いが3.1cm以上の寛被部が残存し、長頸鎌に属する (21)。

長三角形式3類 鎌身断面は平または片丸造りと推定され、逆刺は無く関を有している。鎌身長は2.2cm前後と小さい (6、11、22、29)。関の形状は錆ぶくれのため不明瞭であるが、22では主軸に対してほぼ直交している。29は寛被が観察されないが、寛被部一基部の長さが5.3cmを計る。

長三角形式4類 鎌身断面は平造りで、逆刺はなく関を有している。鎌身長は推定4 cm前後で、側

辺が直線的なため平面形はほぼ二等辺三角形を呈している。篋被・基部の形態は不明である(8)。
柳葉形式1類 鐵身断面は片丸ないし平造りで、長さ1.2~1.6cmの深くて細身の脇袂を有するものである。鐵身部の長さから、5.5cm前後の9・16、8cm前後の12に細分される。いずれも篋被部で破損しているため、篋被・基部の形状は不明である。なお、12は先端部に白玉が付着している。

柳葉形式2類 鐵身断面は片丸造りで、狭長な鐵身部に逆刺はなく、短く斜めに立ち上がる関を有する(26・28)。26は鐵身部の先端を僅かに欠くが残存長5.4cmを計る。篋被部は1.6cmと短く、関篋被から下の基部は2.7cmが残存している。28は錆ぶくれで不明瞭ではあるが鐵身長6cm前後を計る。関は26と同様であるが、篋被は不明である。基部の一部に植物を巻いて漆を塗布した矢柄痕が残存している。

柳葉形式3類 鐵身断面は片丸ないし平造りで、鐵身部の先端寄りに最大幅があり、下方の側辺は緩やかに内湾している。篋被部は無いが、鐵身部の最小幅部分までが刃部であり、その下方は徐々に厚さが増して基部に至っている(3、5、7、32)。なお、5・7はほぼ同形であり、遺存度が良好な7は鐵身長5.8cm、同最大幅2.0cm、基部長5.4cmを計る。

その他 主頭壺筋式または柳葉形式に属すると推定される19がある。鐵身部の上半を破損し、関の有無は不明であるが、短い篋被部を有し、関篋被の下の基部は3.1cmを計る。

18は下部が二股に分かれた左右対称の鉄製品であることから鐵として扱っている。この場合、鐵身長は5cm前後で、側辺が下寄り内で内湾する無茎鐵となる。類例を見ないものであり、別器種の可能性も考えられる。

劍(33~40) 8点を図化している。このうち33~38は切先部分が残存し、39・40は身と基部の小破片である。このことから本遺跡には最低8本(以上)の劍が存在したと捉えておきたい。劍はいずれも錆を持たない両丸ないし平造りのもので、残存する基部に目釘穴は確認されていない。また、柄または鞘に伴う装具や木質部の付着は観察されていない。なお、このほかに劍ないしは鎌と推定される鉄片181点が出土している。

33は細長の身を有するもので、残存長27.4cmを計る。刃幅は基部寄りほど大きくなり、最下端で刃幅2.7cmを計る。

34は身の中央部と基部下端が破損しているため復原図化している。身は中央の破損部付近で僅かに湾曲している。刃幅は3.0cm前後で切先寄りと基部付近で差はほとんどない。関は不明瞭ではあるが、身の最下部から僅かに減幅しながら基部に至っている。

35は身の上半に欠失した部分があるため復原図化している。34と比較して小形であるが、関・基部は同じ形状を呈している。残存長24.5cmで、身の復元長は18~19cmである。

36は身の部分で、残存長17.8cmを計る。切先と下側を破損している。縁辺部の大半が破損しているが、刃幅3.0cmを計り、34とほぼ同形の劍と推定される。

37は残存長27.2cmを計り、両端を僅かに破損している。基部は身の中心線上から僅かに片側(実

測図の右側)に寄っている。身の復元長約22cm、基部の残存長5.4cmを計る。なお、裏面に植物質の圧痕が観察される。

38は身の上半部で、残存長9.1cm、刃幅2.7cmで、34・36とほぼ同形の剣と推定される。39は身の一部分で、残存長6.9cm、刃部幅2.9cmを計る。40は基部の端部で、残存長3.2cmを計る。

刀子(41~53) 刀子として識別できたものは21点あるが、このうち13点を図示している。すべて破損品であり、全形を窺えるものは僅かに2点(41・51)だけである。このため、刀子の長さによる区分はできないが、刃幅に着目すれば刃幅1~1.5cmの小形品(41~43、45、51~53)、刃幅2cm前後の中形品(44、46、47、49)、刃幅2.5cm以上の大形品(50)に分類される。

小・中形品は棟側が無関で、刃側に直線的で斜めに短く切れ込む関を有しているものが多いが(41、43~45、51)、42は両関の可能性が考えられる。基部は茎尻が直線的であると推定される(48・51)。身部は棟・刃のあり方からさらに3種に細分される。

A類：棟側は茎から切先まで直線的だが、刃側は大きく外湾している(51・53)。刃幅の最大部分が関寄りにある51、切先寄りにある53がある。

B類：棟側は茎から切先まで直線的だが、刃幅の最大部分が関にあるため、刃側は切先に向けて徐々に減幅している(44)。

C類：棟と刃側はほぼ平行して伸びているが、切先付近で両側とも減幅しながら切先を形成している(41、52)。

大形品(50)は身部の約1/2を破損しているが、基部はほぼ完存している。関は両関と推定されるが、身部は茎から下方に屈曲している。茎部長8.8cmを計り、茎尻は円頭を呈している。

鎌(54~67) 14点を図化している。このうち、遺存度が良好で全形を捉えることができたのは5点だけである(59・62・65~67)である。

59は先端部を僅かに破損しているが、残存長10.3cm、刃幅2cm前後の曲刃の小形鎌である。狭長な長方形の板状素材を使用しているが、刃部は途中から刃幅を徐々に狭めながら下方に曲げられている。着柄部の折り返しは1.5cmの長さでほぼ直角に立ち上がっている。

62は棟側の縁辺の大半を破損しているが、残存長14.8cmの曲刃の中形鎌である。基部は刃側が直線的であるのに対し、棟側は僅かに湾曲するものと推定される。刃部は残存部で刃幅3.0cmを計り、先端は嘴状を呈している。着柄部の折り返しは約75°の角度で折り曲げられている。

66は両端を僅かに破損しているが、残存長15.8cmの曲刃の中形鎌である。着柄部に最大幅があり、棟側は直線的であるが、刃側は緩やかに内湾している。刃幅は2.9~3.3cmと先細であり、嘴状の切先部分が僅かに下方に曲げられている。

65・67は錆ぶくれで端部の状況が不明瞭ではあるが、直刃の小形ないし中形鎌である。いずれも着柄側が幅広になる不整長方形の鉄板を素材にしている。棟側は直線的であるが、刃側はいったん僅かに内湾した後、棟と平行しながら刃部を形成している。刃部の先端部は円頭ないし撫角の方頭

に仕上げられている。

65は着柄部の一部を破損しているが、残存長11.1cm、刃幅3cm前後を計る。なお、着柄用の折り返しがない点で、未使用の鎌の可能性が考えられる。

67はほぼ完形品で、全長10.2cm、刃幅2.3cm前後を計る。

55・57・61は基部から刃部にかけての破片である。55は残存長7.1cm、刃幅2.1cm前後を計る。錆ぶくれと剥落が激しいが、着柄用の折り返しが観察される。着柄部に最大幅があり、棟側は直線的であるが、刃側は内湾している。57は基部の一部で、残存長6.7cmを計る。端部を破損しているが、着柄用の折り返しが僅かに観察される。61は縁辺部の破損が多い上に、着柄用の折り返しが認められないが鎌と推定した。着柄部に最大幅があり、棟側は直線的であるが、刃側は徐々に減幅しながら緩やかに内湾している。残存長10.9cm、刃幅2.4cm前後であり、曲刃の中形鎌に属するものである。

56・64は切先を含む刃部である。56は縁辺部の破損が著しいが、棟はほぼ直線的であり、刃側は僅かに内湾し、嘴状の切先部分が僅かに下方に曲げられている。直刃と曲刃の中間的な要素を持つ鎌で、残存長13.3cm、刃幅3.9cm前後の中形ないし大形鎌である。64は刃部中央から切先までの部分で、残存長9.0cm、刃幅3.2cm前後の曲刃の中形鎌である。刃先部分は棟・刃側とも比較的に急な角度で下方に曲げられている。

54・58・60・63は両側を破損している刃部の破片である。いずれも刃幅は3cm前後であることから、中形鎌に属するものと推定される。

鎌・鋤 (68) 鋤または鋤のU字形刃先で、耳部の上半部分である。錆ぶくれで観察しにくいですが、木製刃部を受ける断面V字状の溝(袋部)が認められる。残存する耳部の刃幅は3.4cmである。

不明鉄製品 (69~74) 器種を特定できない鉄製品が10点出土している。このうち2点は近・現代に属すると考えられるものであり、古墳時代に伴う8点のうち6点を図化している。これらは比較的大形の板状鉄板で、いずれも幅や断面形から鎌や剣とは考えられないものである。

このうち70・72・74は不定形を呈しているが、69・71・73は長方形を呈する鉄板である。

69は片側(1辺)を破損しているもので、大ききから着柄用の折り返しを持たない鎌の基部の可能性も考えられるが、71・73は四辺が残存している。71は5.9×4.8~5.0cmの長方形を呈している。73は8.2×5.5cmで、短辺の片側はコ字状で直線的であるが、他辺は撫角で僅かに外湾している。

註

1. 松本市教育委員会 1990 『松本市向畑遺跡目録』

2. 鎌の分類に関しては次の文献を参考に記述している。

寺沢 薫 「収獲と貯蔵」『古墳時代の研究』4 1991 雄山閣出版

3. 鋤・鋤の名称は次の文献を参考に記述している。

野村一寿 「鉄製鋤・鋤先」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4』1990 長野県教育委員会

第4章 調査のまとめ

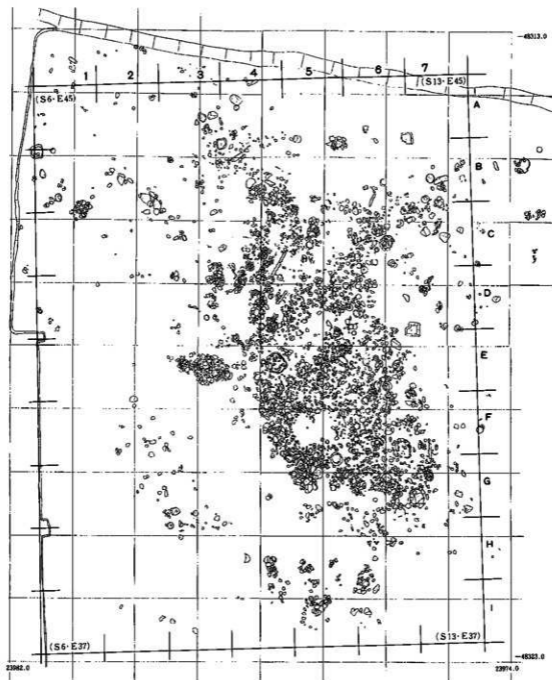
今回の調査の一番の成果は、古墳時代中期という単時期の遺跡で、ごく狭い範囲から多量の遺物を出土した1号土器集中区という祭祀遺構である。ここからは正位におかれた高杯、逆位に置いたミニチュア（手捏ね）土器など、そして多種多量の玉類、模造品の石製品類、鉄器その他剣もある鉄器類、更に土製品として勾玉、鏡、木製の櫛等が見られた。この微高地にある土集に対して流路内にある6号土集には供えられたままの高杯が出土している。この高杯は故意に脚部を欠いたままであり、その点土器の器種によっては完形・破損を問わないことが知れる。又、流路内の他の土集も中洲にある4号土集、斜面から流底に当たる5号土集にも祭祀のあり様を見ることができる。更に2・3号土集には土器の集中傾向が強く、祀られたものか、あるいは祭りのあとの遺棄なのか、ともかく祭祀の結果を示している。これに対し、2・8・9号土集は土器密度が疎で、6号土集で知れるように土器の疎密は祭祀の条件になり得ないから、1号土集が集団祭祀というならば、これらは個人祭祀というべきものであろうか。微高地上には1号住居址廃絶後の窪地が祭祀の場となっており、小規模祭祀の存在も明らかである。小片土器の非常に多い11~14号土集、7・12号土集などは廃棄の場と見るのが妥当であろう。

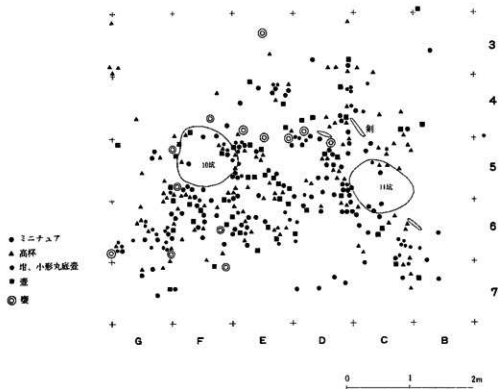
微高地と流路内の祭祀の遺物の差は、玉・石製品類・鉄器類である。1号土集では三種の神器のうち、鏡は土製模造品が1点であるが、勾玉1点・剣8点が本物である。420点もの土器と5,000個以上の玉類、そして神器から考えると、奉祭主はやはりこの辺の首長であろう。では何に対しての祭りか。流路は「荒ぶる川」の様子はなく、静的な沼の様子さえ見せている。西にある奈良井川は平時は伏流となり、飲料水・稲作用に利用できても、いざ洪水になると「恐ろしい神」と変化し、その神に対してであろうか。あるいは堆積地の末端部より稲作を考えると、農耕神に対するものなのか。そうすると鉄器の中でも鎌・刀子等が重きをなしている筈である。流路内の2~10号土集は石製品・玉類が貧弱で、鉄器となると僅か3点に過ぎない。これも集団による祭祀より、個人的な祭り中心の為と考えたい。土鍾の26点は土器を伴わないで、ここからだけの出土である。漁に対する感謝の祭りなのであろう。住居址は3軒あり、祭祀遺構と時期がほとんど同じであり、又、遺構はないが墓らしき合口土器棺もある。居住域はすぐ近くに存在しようが、ある時期にこの一帯が祭域として使用されたと考える。尚、当地南東には出川西遺跡があり、ここより700mで弥生時代中期の土器を多出する地点が既に確認されている。時代と共に徐々に集落が西進して来たようである。

参考文献

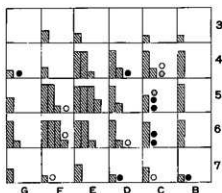
1. 笹沢 浩 1982 「駒沢新町遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡 北・東信』
2. 桜井秀夫・三上徹也・宮脇正実 1993 「祭祀における面額とその変容」『長野県考古学会誌69・70号』
3. 亀井正道 「神ノ島と古代祭祀」『古代を考える』

圖 版

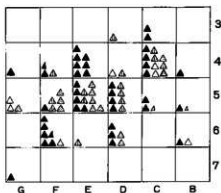




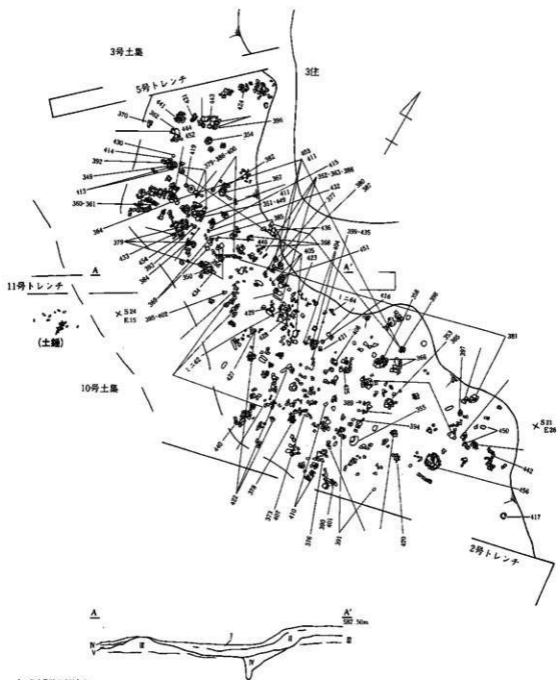
土器出土模式図



石器出土模式図



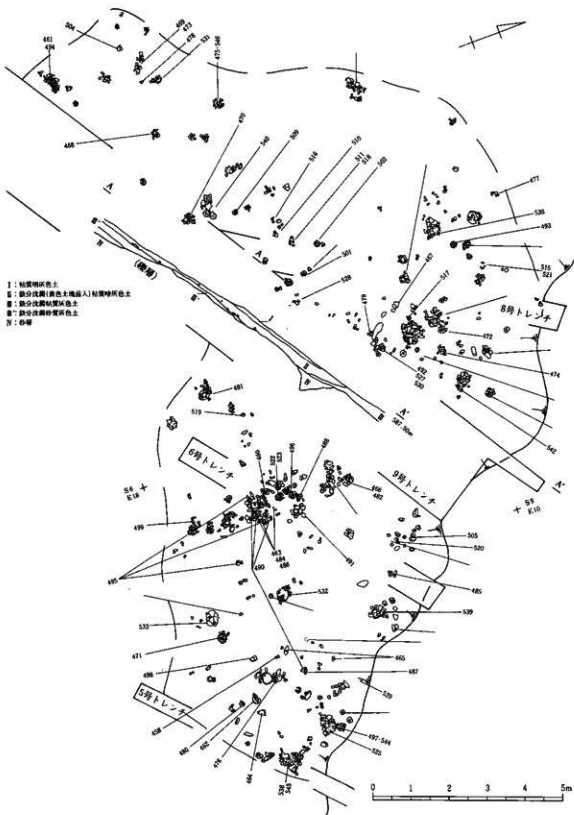
鉄器出土模式図

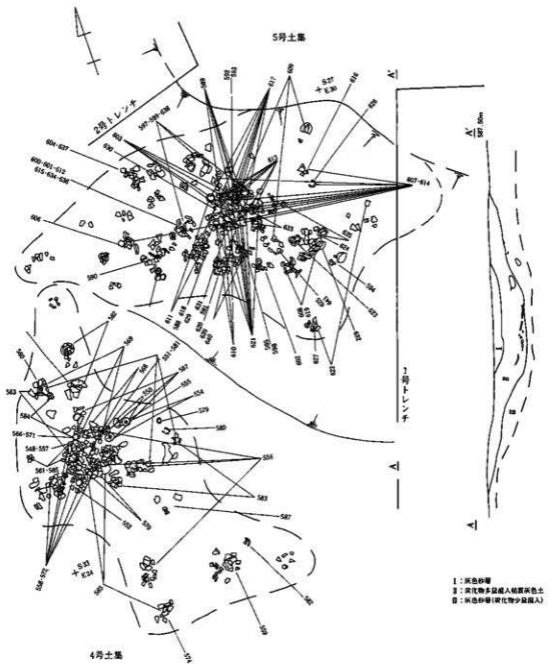


- I : 摩少量器人形彩色土
- II : 数分浅黄砂器
- III : 赤い土砂器
- IV : 淡黄色土器器人形彩色土
- V : 粘黄褐色土



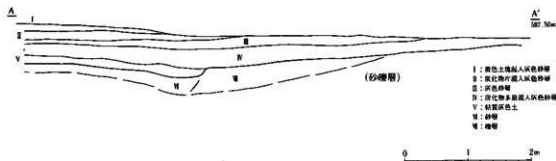
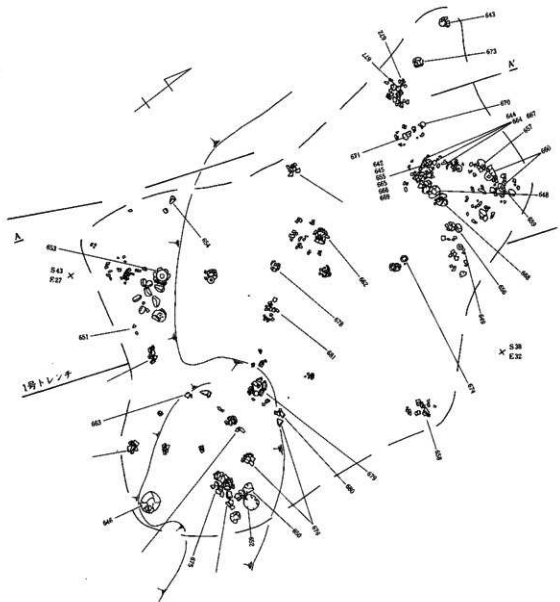
図版 4
第3号土器集中区

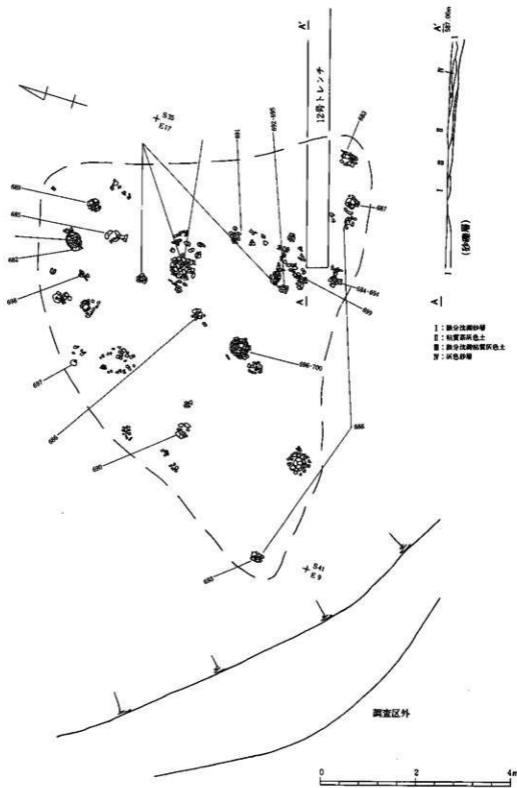




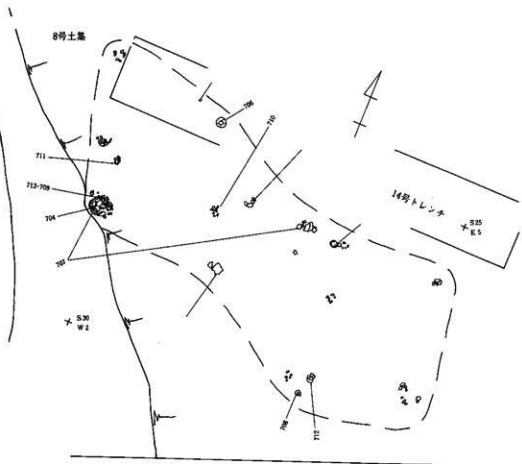
- 1 : 灰色砂層
- 2 : 炭化物多量混入粘質灰色土
- 3 : 灰色砂層(炭化物少量混入)







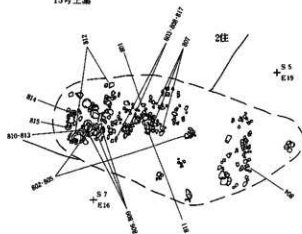
調査区外

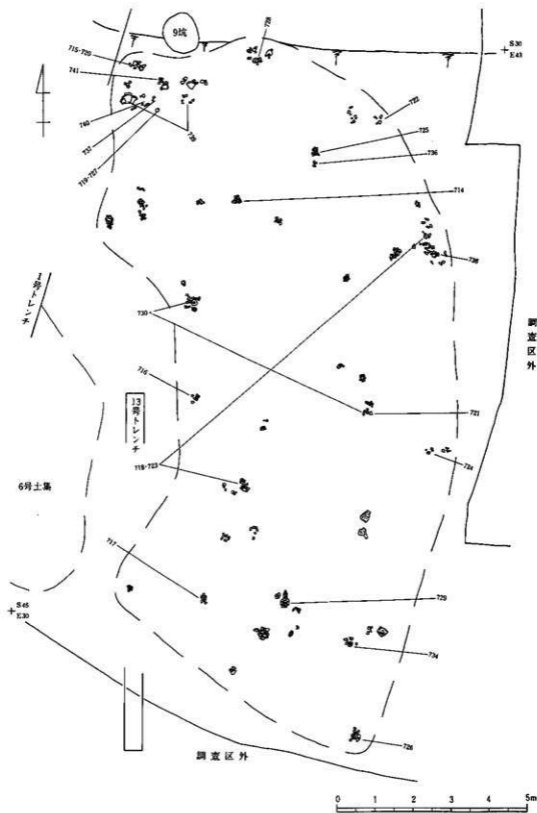


2号トレンチ

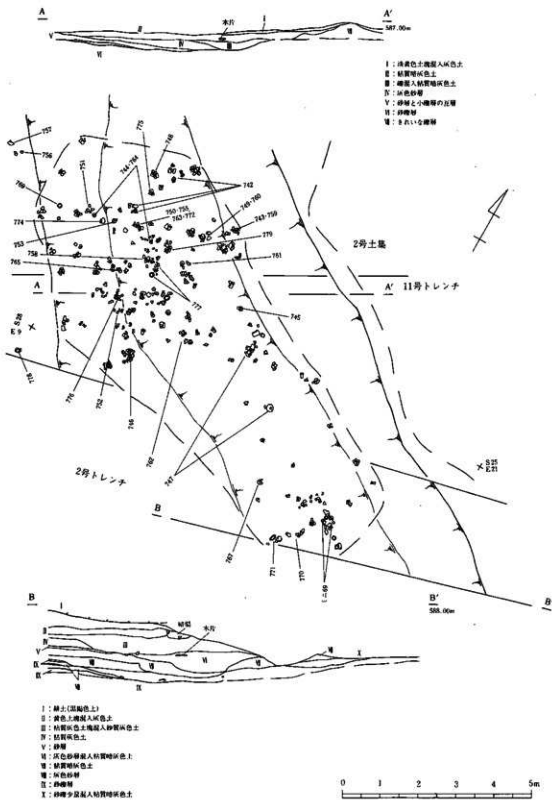


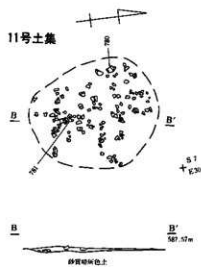
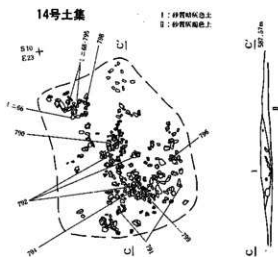
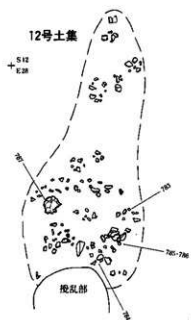
15号土器集

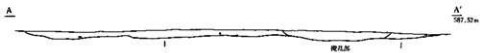
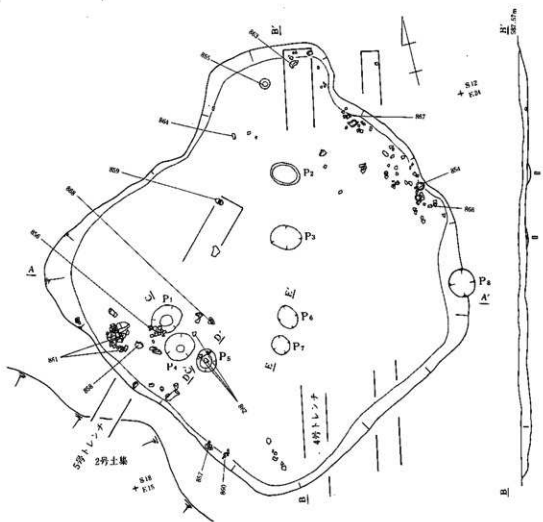




図版10 第10号土器集中区





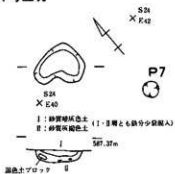


I : 砂質褐色土
 II : 硬質人砂質褐色土
 III : 褐色土塊質人砂質褐色土

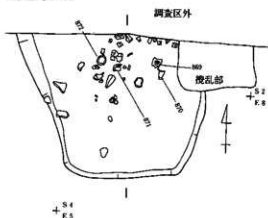


圖版 14 第1号土坑

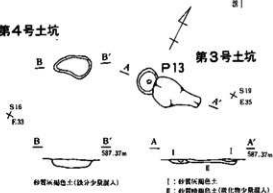
土坑 (1)



第2号土坑

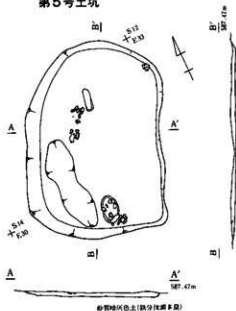


第4号土坑

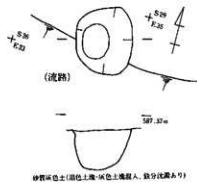


第3号土坑

第5号土坑



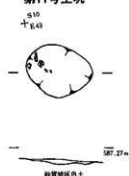
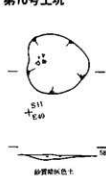
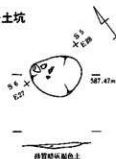
第9号土坑



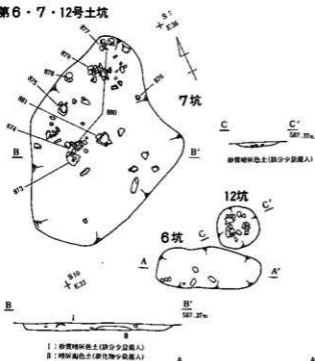
第10号土坑

第11号土坑

第8号土坑



第6・7・12号土坑



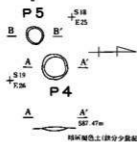
P 1



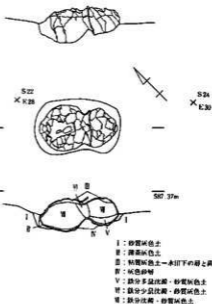
P 6



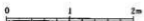
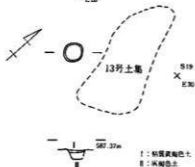
P 4・5



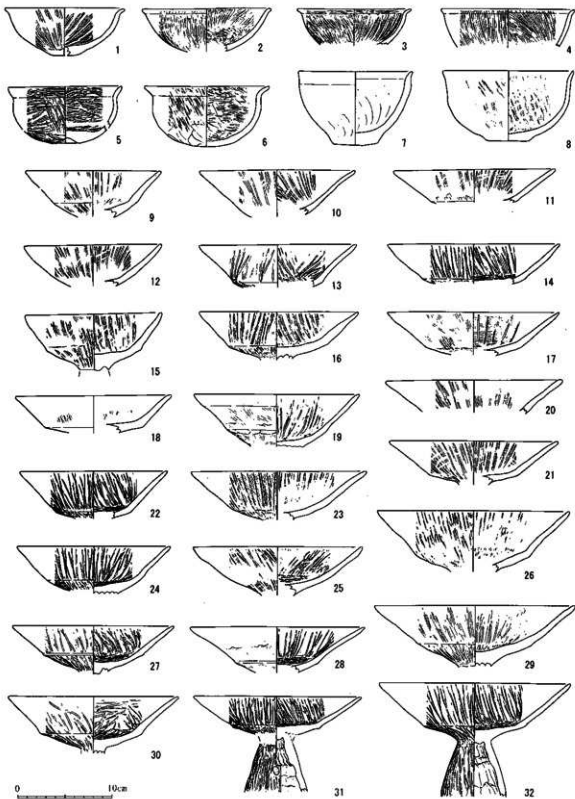
合口土器棺

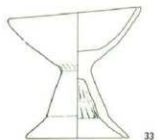


P 8

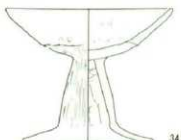


古墳時代の土器
第1号土器集中区

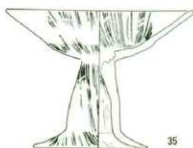




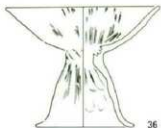
33



34



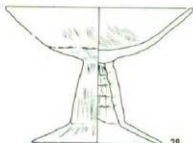
35



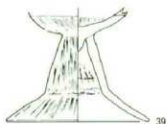
36



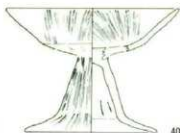
37



38



39



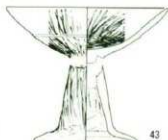
40



41



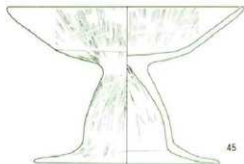
42



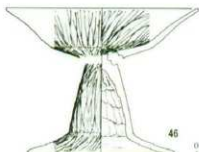
43



44

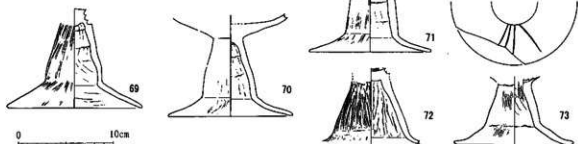
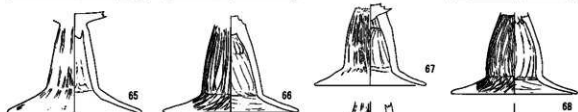
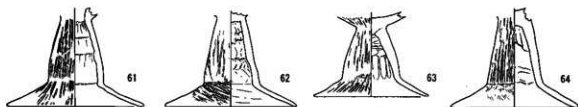
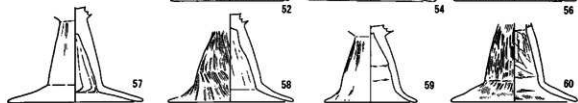
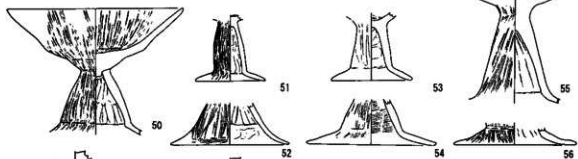


45

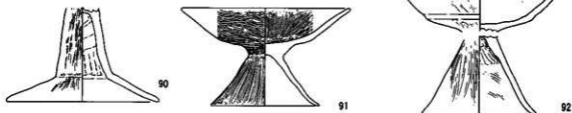
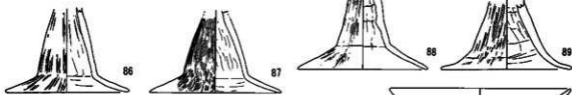
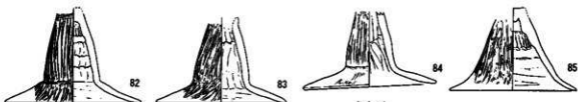


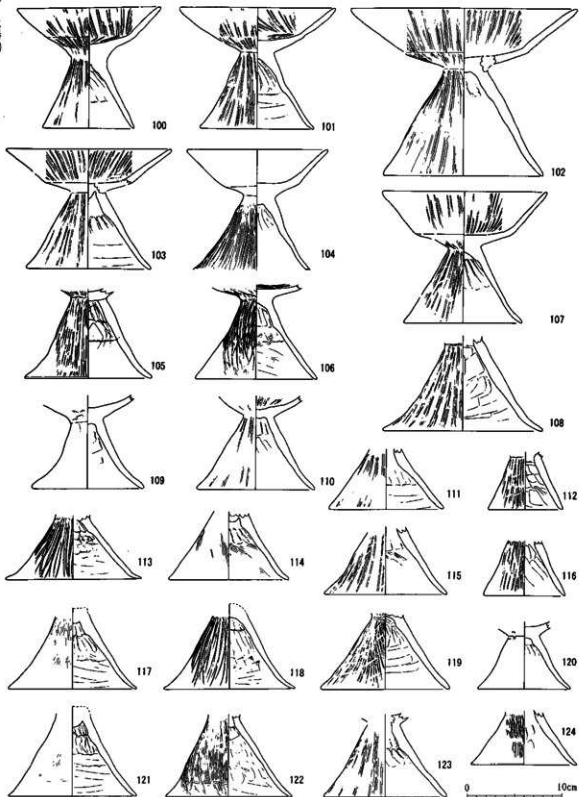
46

0 10cm



0 10cm







125



126



127



128



129



130



131



132



133



134



135



136



139



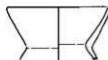
140



137



138



141



142



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153



154



155



156



157



158

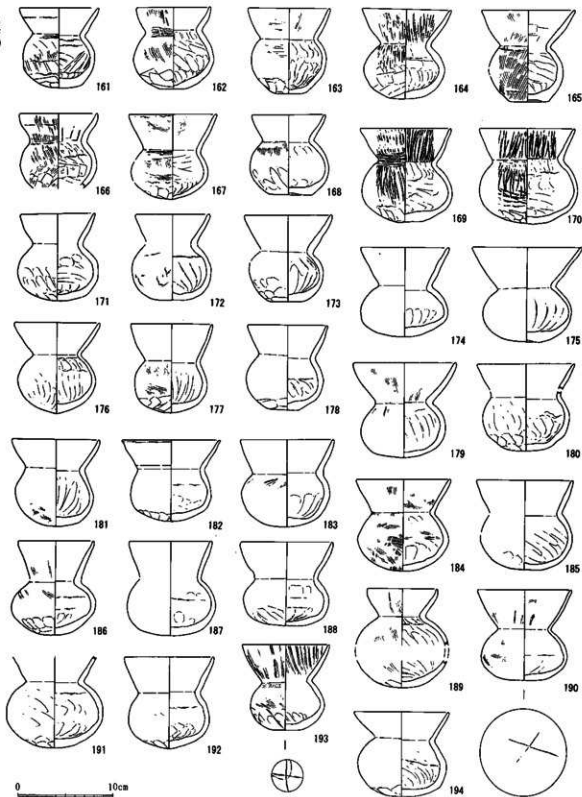


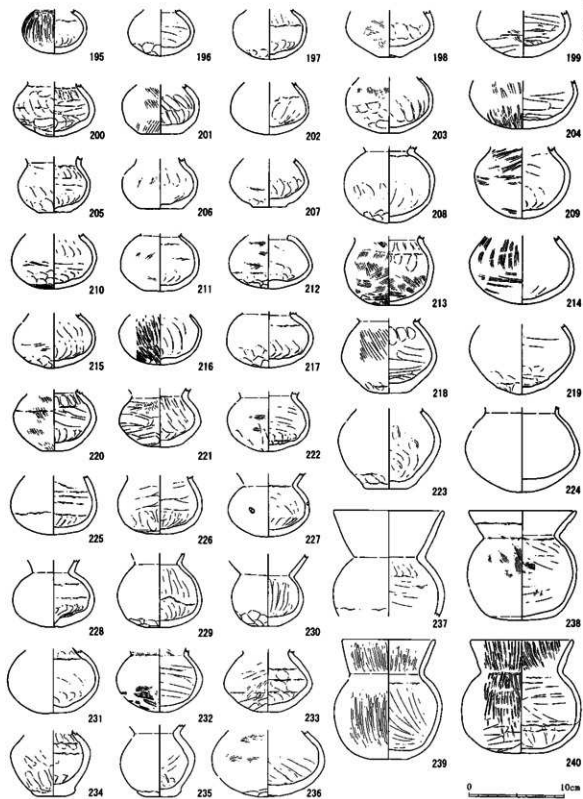
159



160

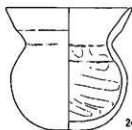
0 10cm







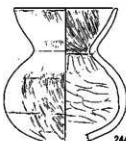
241



242



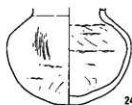
243



244



245



246



247



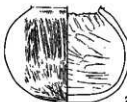
248



249



250



251



252



253



254



255



256



257



258



259



262



260



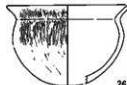
261



263



264



265



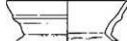
266



267



268

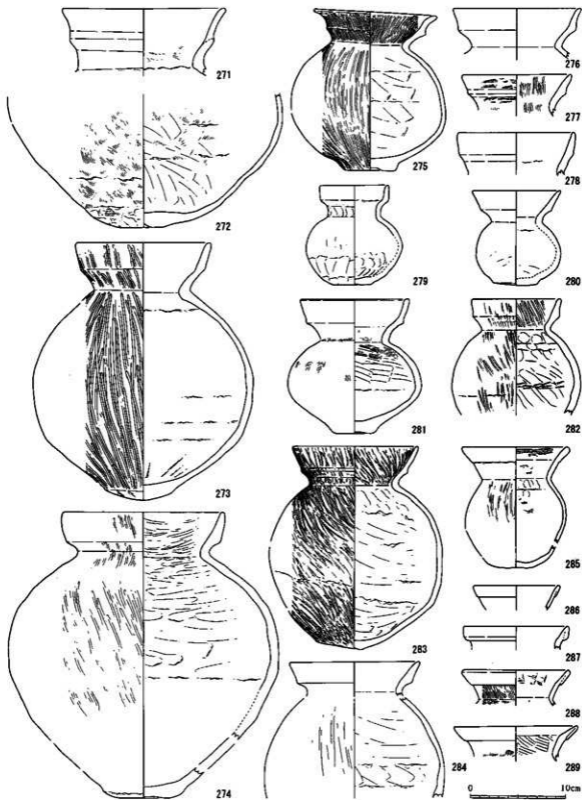


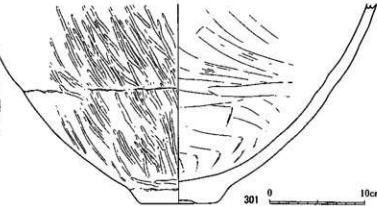
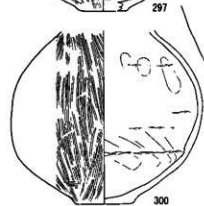
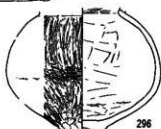
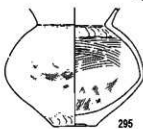
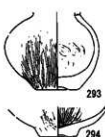
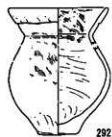
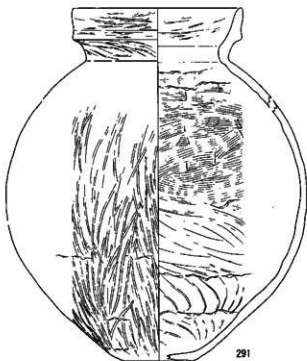
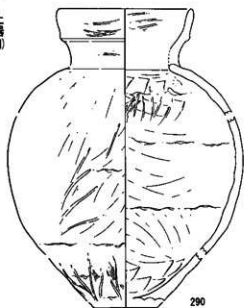
269

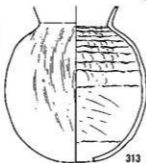
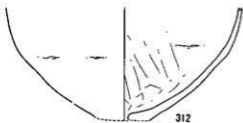
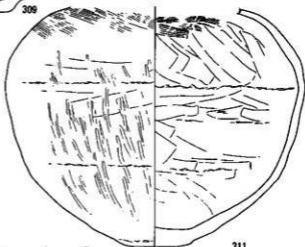
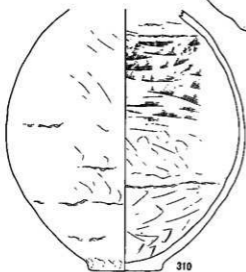
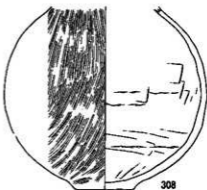
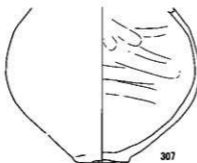
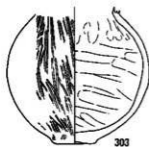
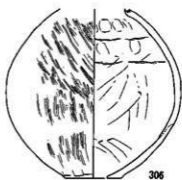
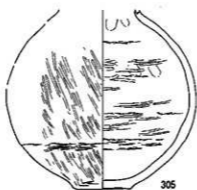


270

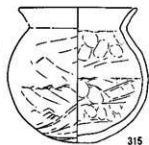
0 10cm







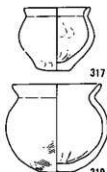
0 10cm



315



316



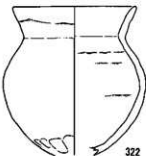
317



318



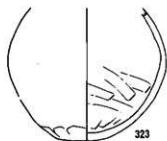
321



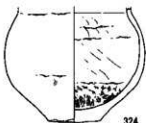
322



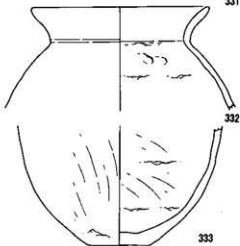
331



323



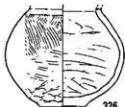
324



332



325



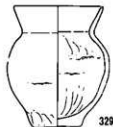
326



327



328

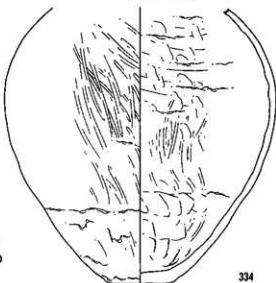


329

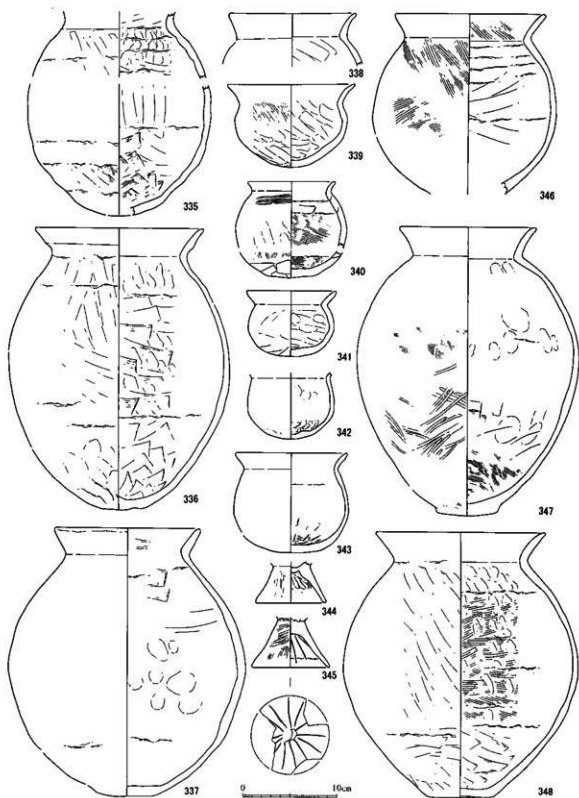


330

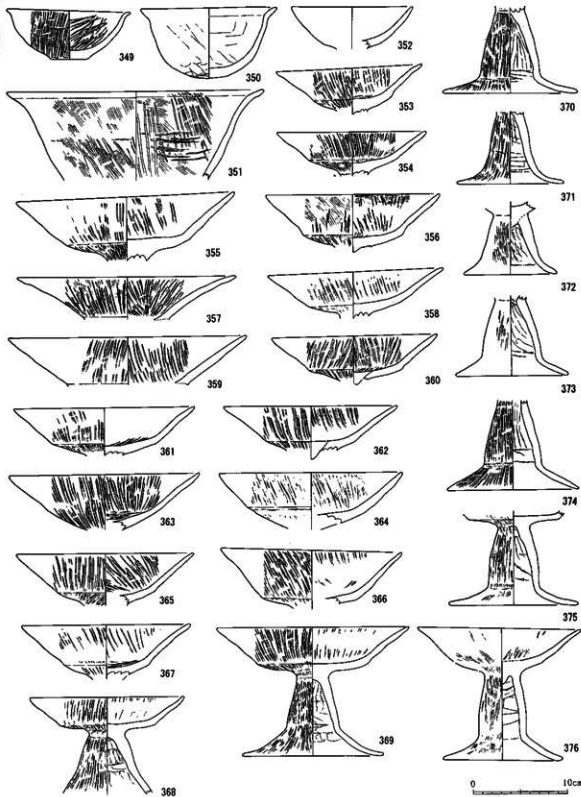
0 10cm

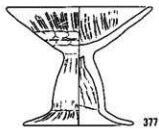


334

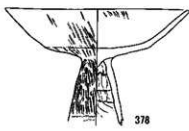


第2号土器集中区

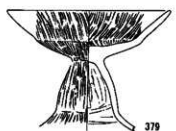




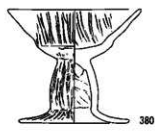
377



378



379



380



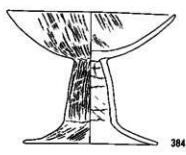
381



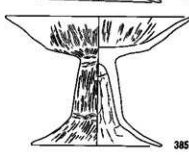
382



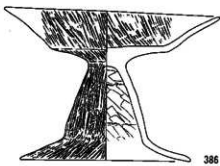
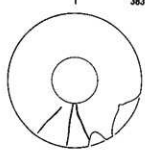
383



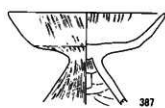
384



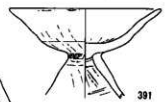
385



386



387



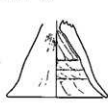
391



388



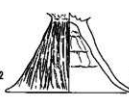
389



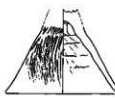
390



392



393

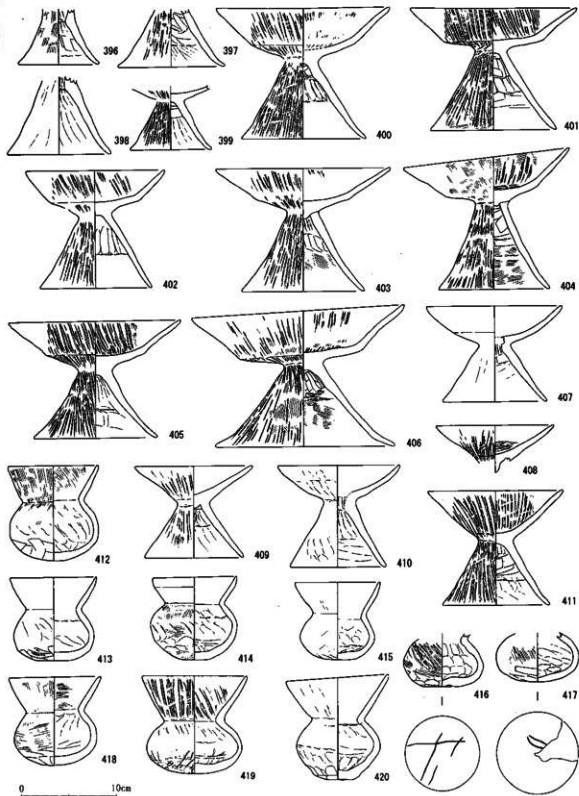


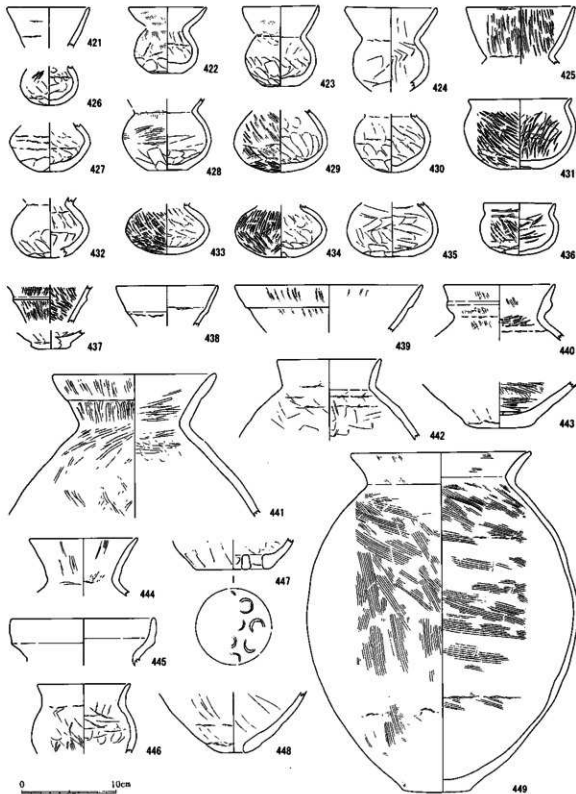
394

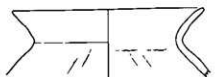


395

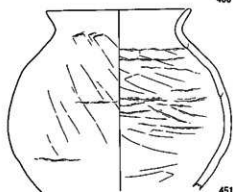




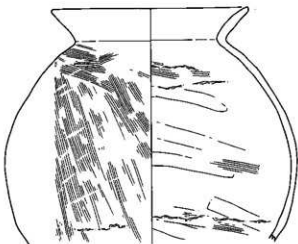




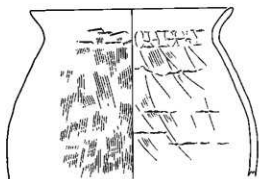
450



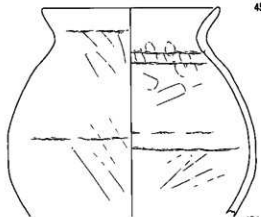
451



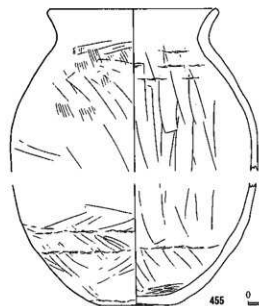
452



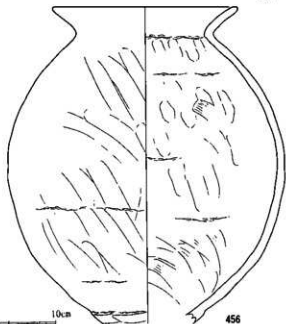
453



454

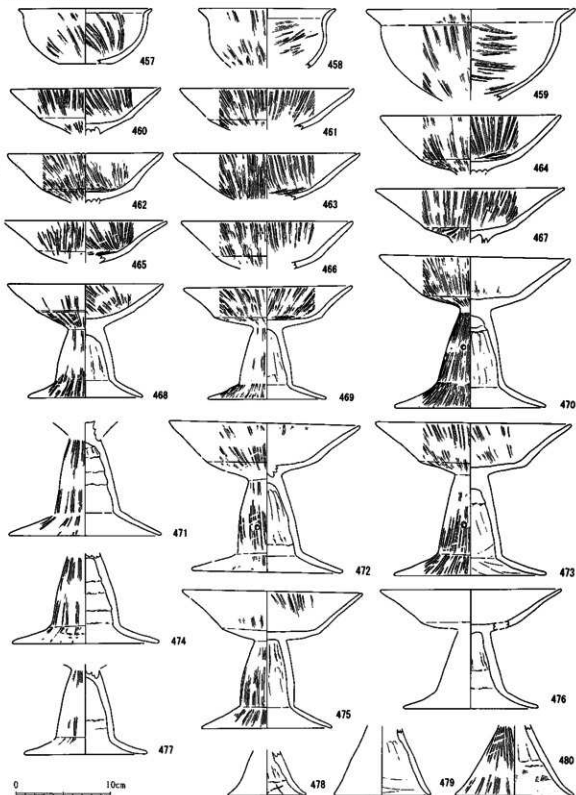


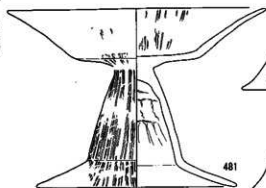
455



456

第3号土器集中区





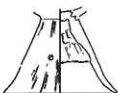
481



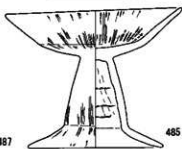
482



484



483



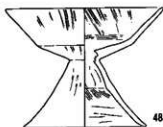
485



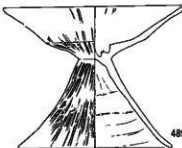
486



487



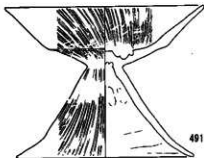
488



489



490



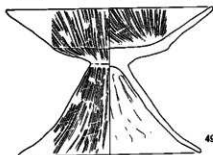
491



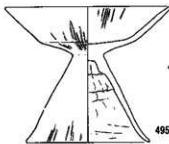
492



493



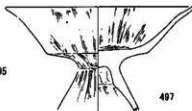
494



495

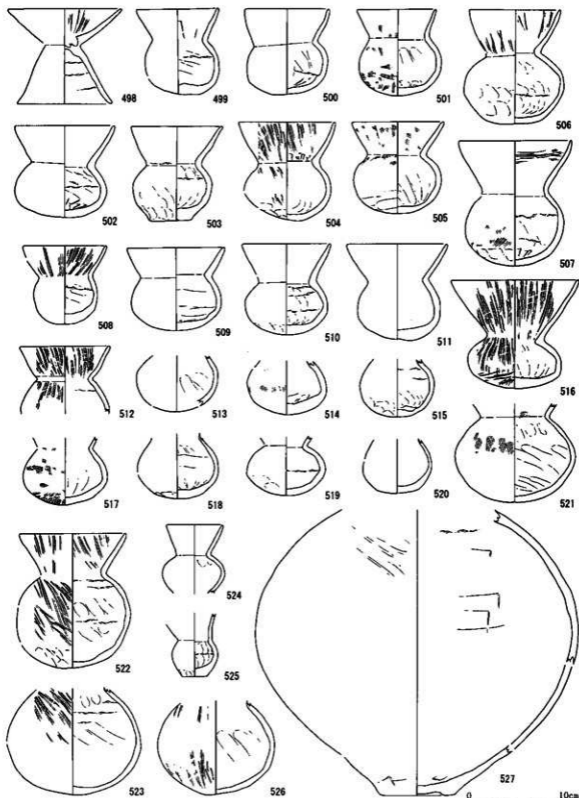


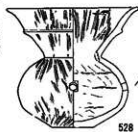
496



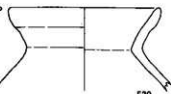
497

0 10cm





528



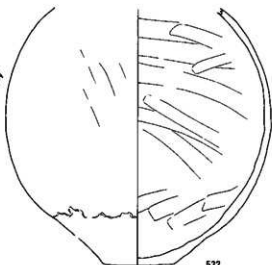
530



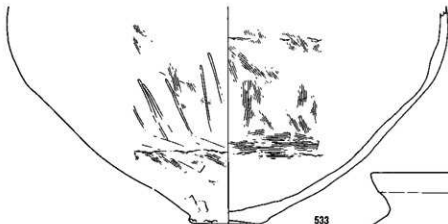
529



531



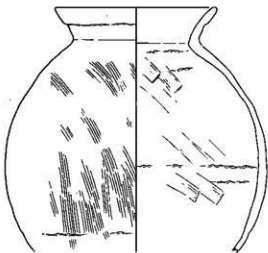
532



533



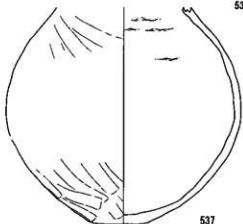
534



535

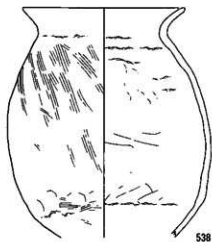


536

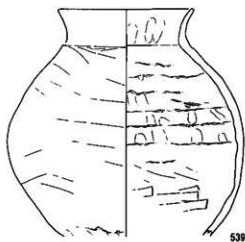


537

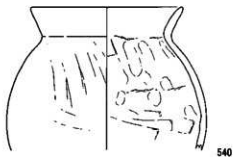
0 10cm



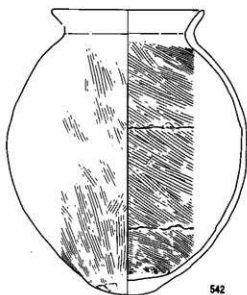
538



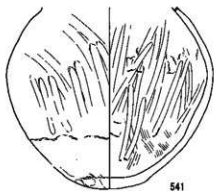
539



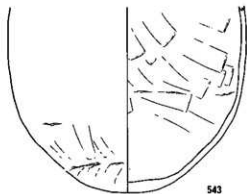
540



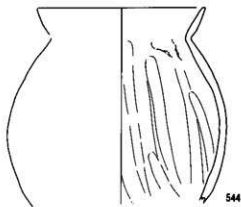
542



541

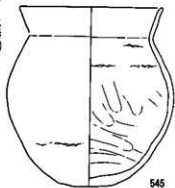


543

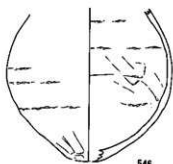


544

0 10cm



545



546

第4号土器集中区



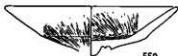
547



548



549



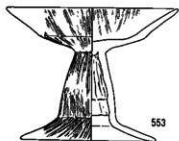
550



551



552



553



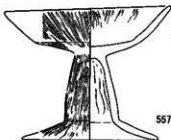
554



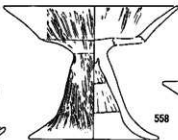
556



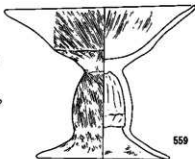
555



557



558



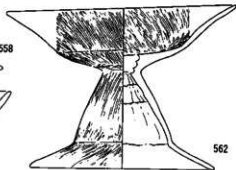
559



560

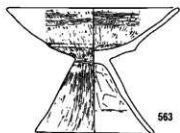


561

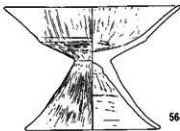


562

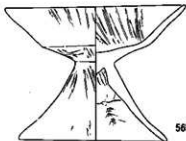
0 10cm



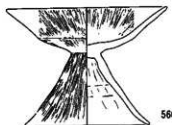
563



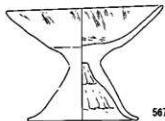
564



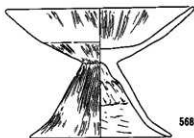
565



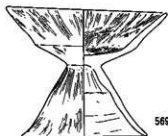
566



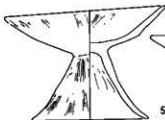
567



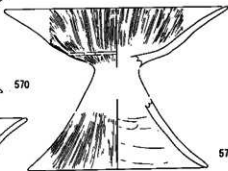
568



569



570



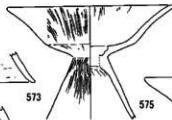
571



572



573



575



577



574



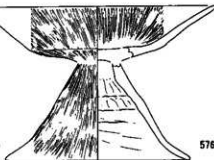
580



578



579



576



581



582

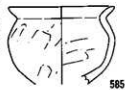


583

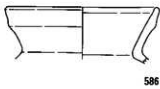


584

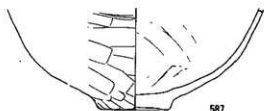
0 10cm



585



586



587

第5号土器集中区



588



589



590



591



592



593



594



595



596



597



598



599



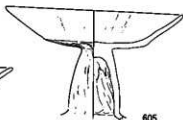
600



601



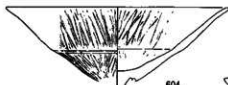
603



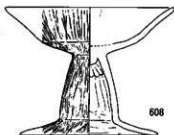
605



602



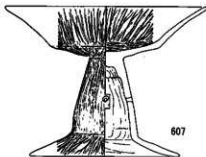
604



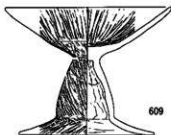
608



606

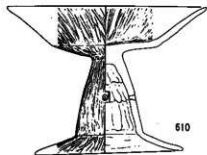


607

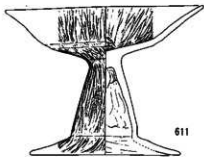


609

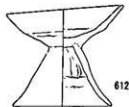




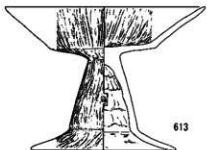
610



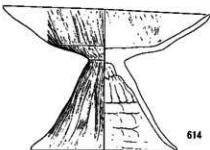
611



612



613



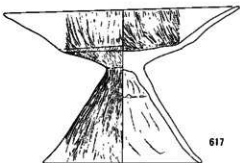
614



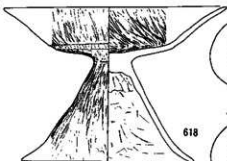
615



616



617



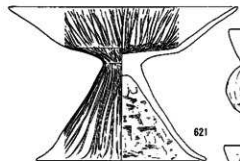
618



619



620



621



622



623



624



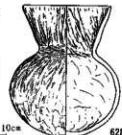
625



626



627

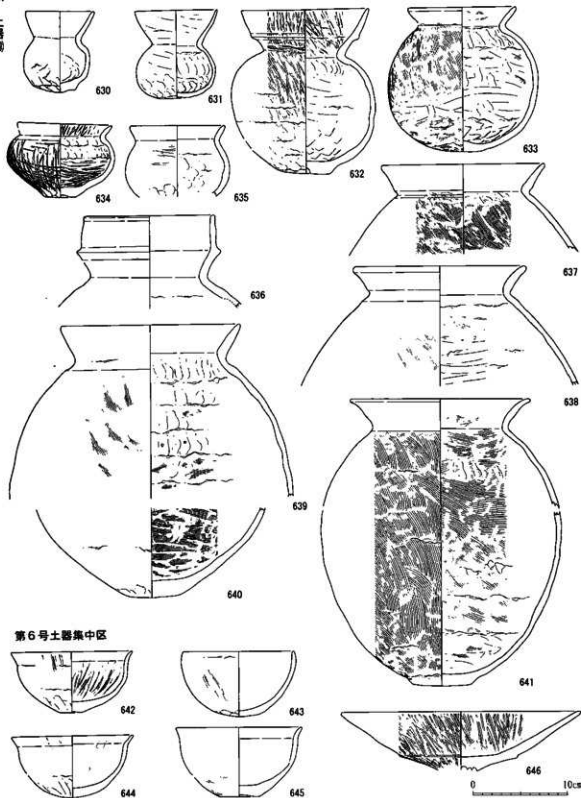


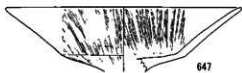
628



629

0 10cm

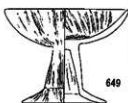




647



648



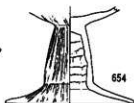
649



650



651



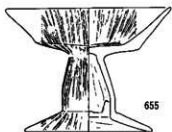
654



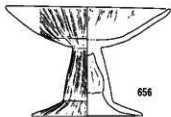
652



653



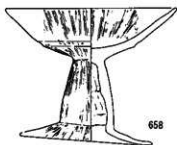
655



656



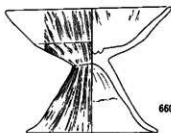
657



658



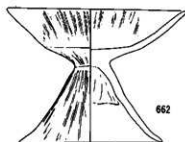
659



660



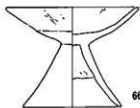
661



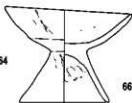
662



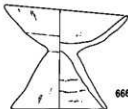
663



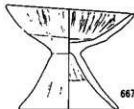
664



665

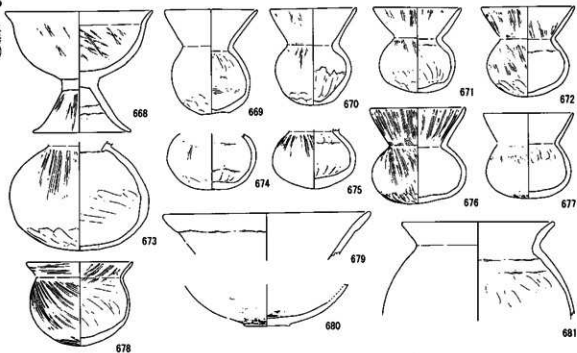


666

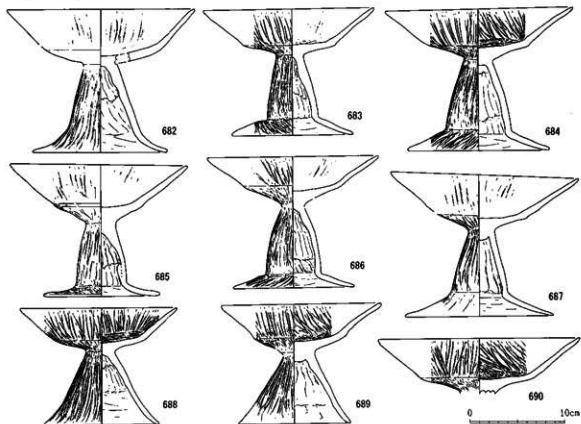


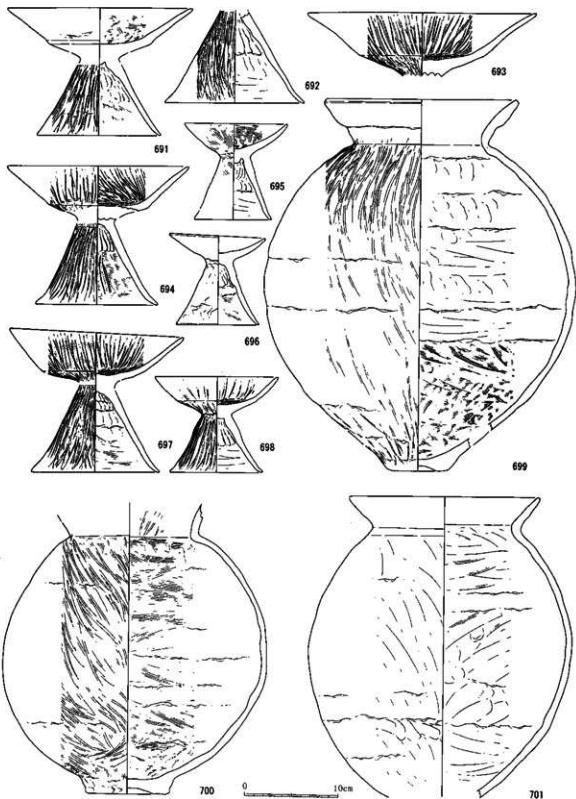
667

0 10cm



第7号土器集中区

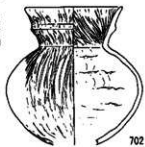




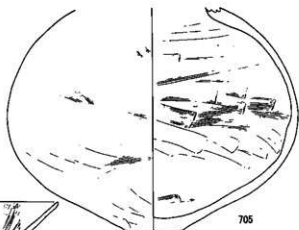
700

0 10cm

701

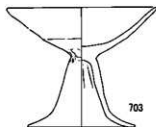


702



705

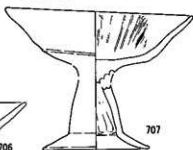
第8号土器集中区



703



704



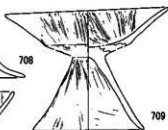
707



706



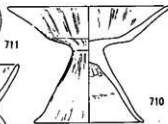
708



709



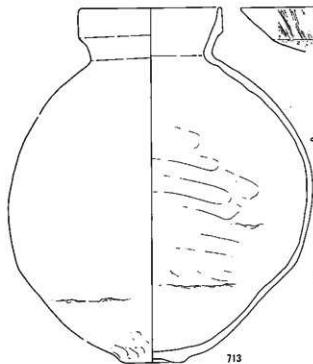
711



710

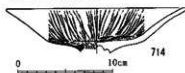


712



713

第9号土器集中区



714



715

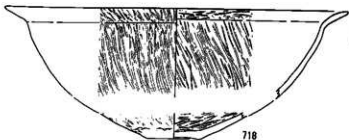


716

0 10cm



717



718



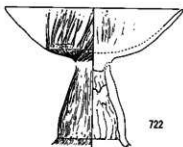
719



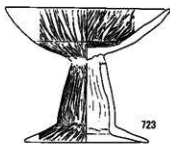
720



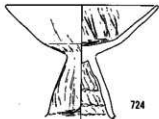
721



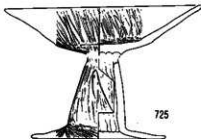
722



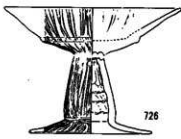
723



724



725



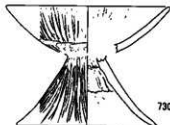
726



727



729



730



728



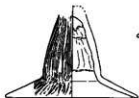
732



733



734



731



735



737

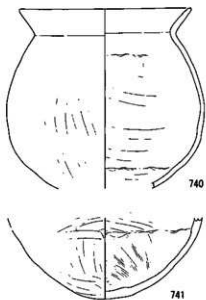
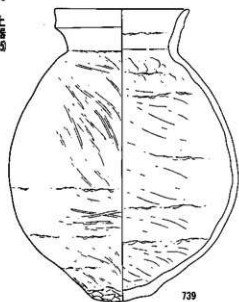


738

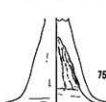
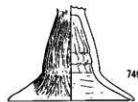


736

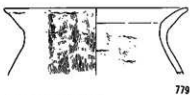
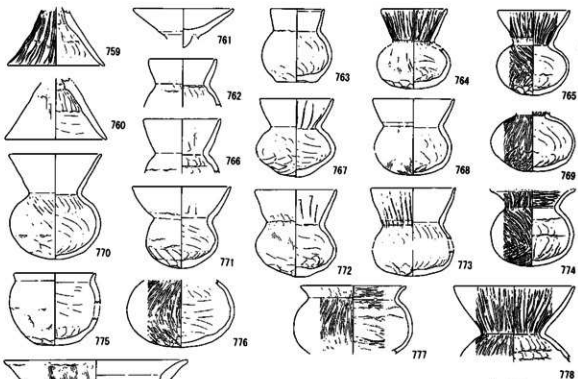
0 10cm



第10号土器集中区

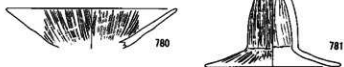


0 10cm

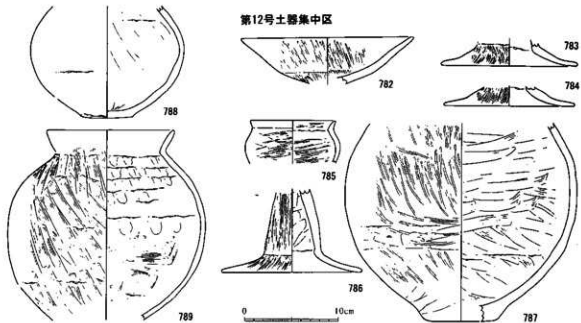


第13号土器集中区

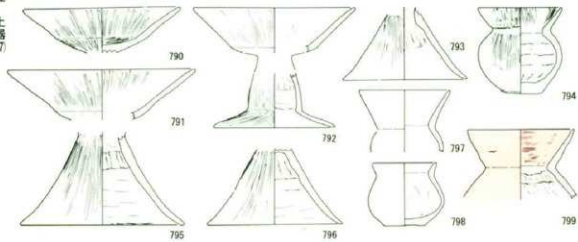
第11号土器集中区



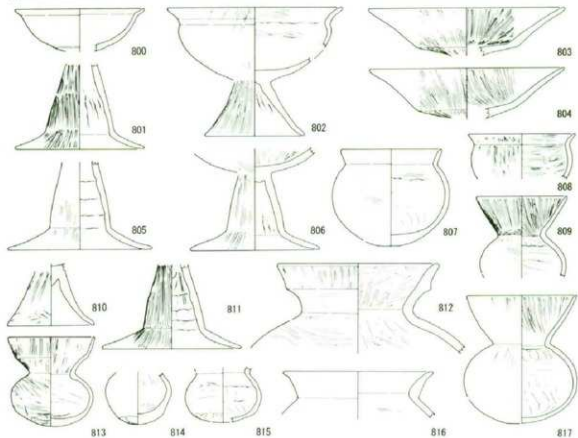
第12号土器集中区



第14号土器集中区

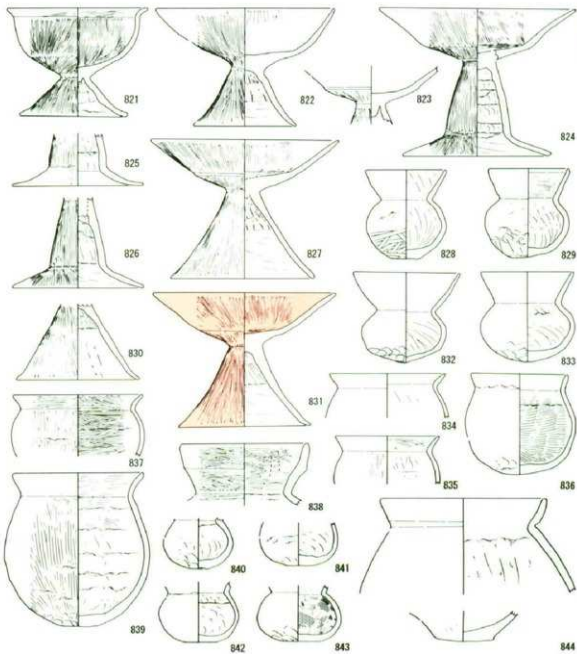


第15号土器集中区

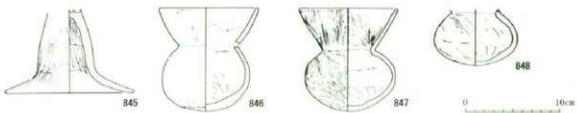


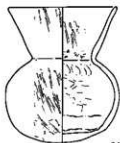
第1号住居址



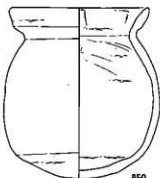


第2号住居址

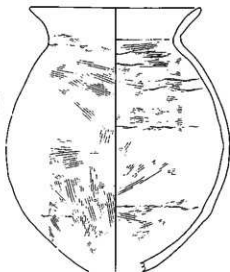




849



850



853



851



852

第3号住居址



854



855



856



857



858



859



860



861



862



864



865



866



867

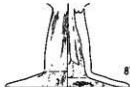


868

第2号土坑



869



870



871



872

0 10cm

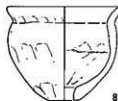
第7号土坑



873



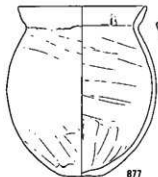
874



875



876



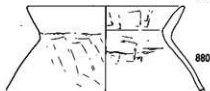
877



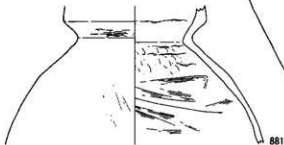
878



879

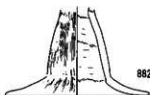


880



881

第5号土坑

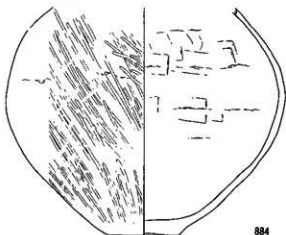


882

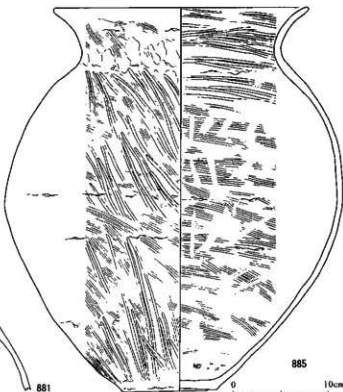


883

合口土器棺



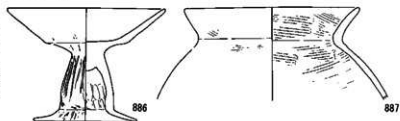
884



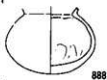
885

0 10cm

第12号土坑



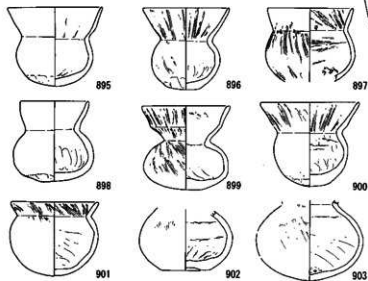
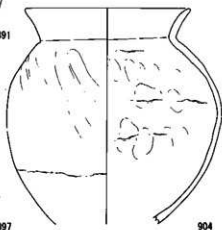
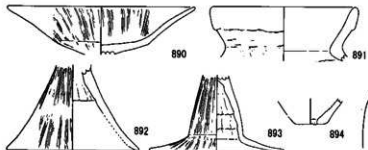
ビット1



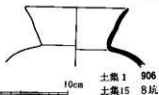
ビット13



検出面

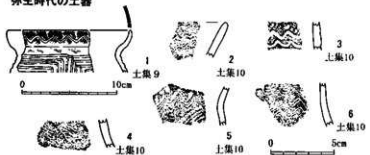


須恵器

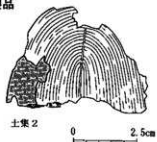


土集1 906
土集15 8坑

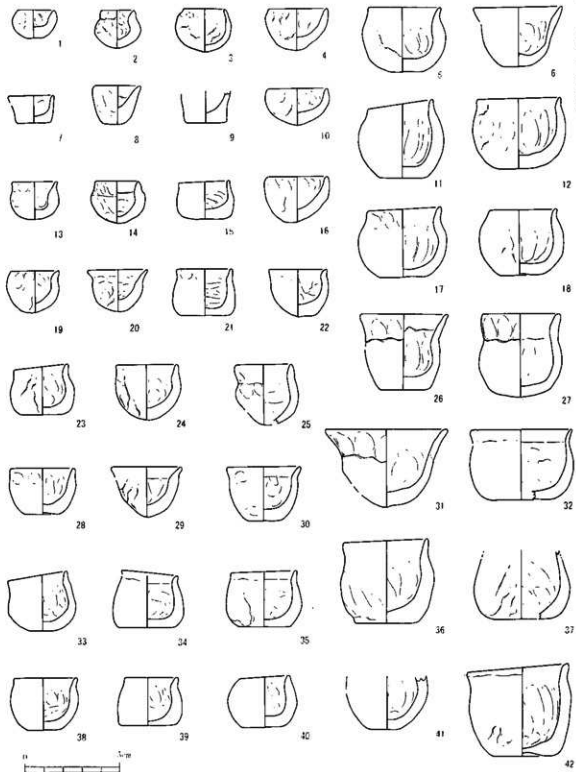
弥生時代の土器

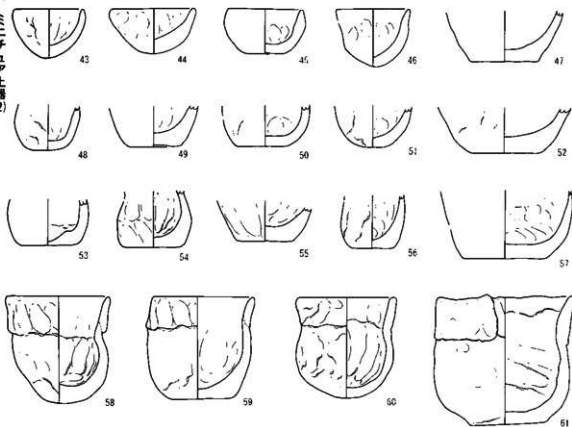


木製品



第1号土器集中区

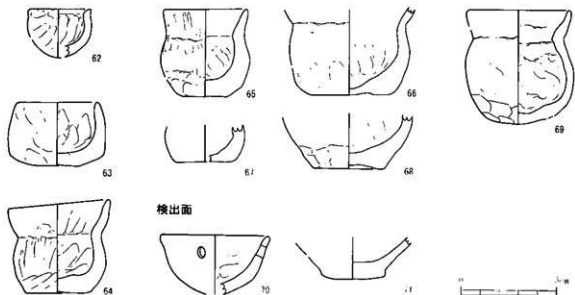




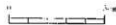
第2号土器集中区

第14号土器集中区

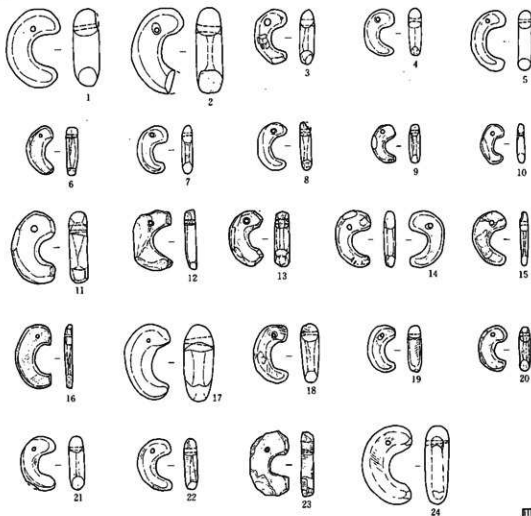
第10号土器集中区



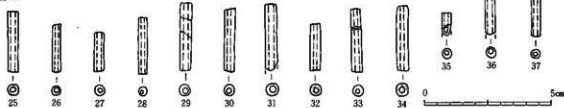
検出面



勾玉



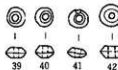
管玉



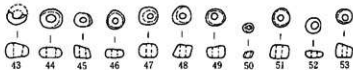
丸玉



算盤玉

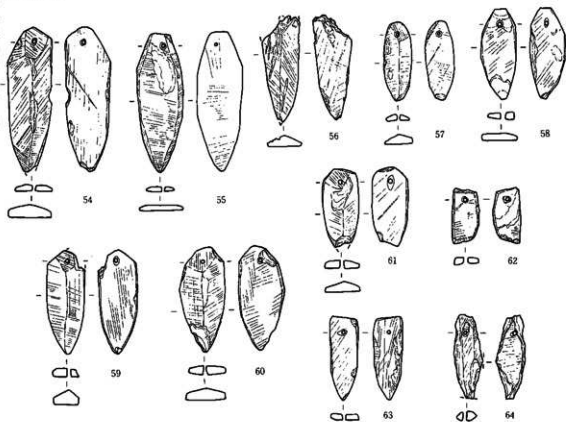


ガラス製小玉

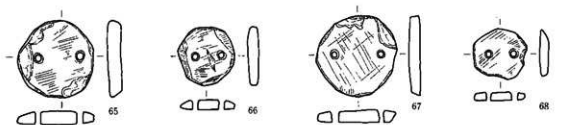


刺形模造品

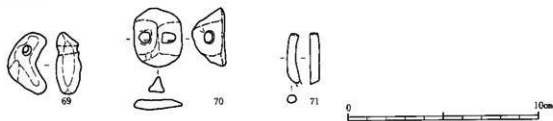
石製品(2)・土製品(1)



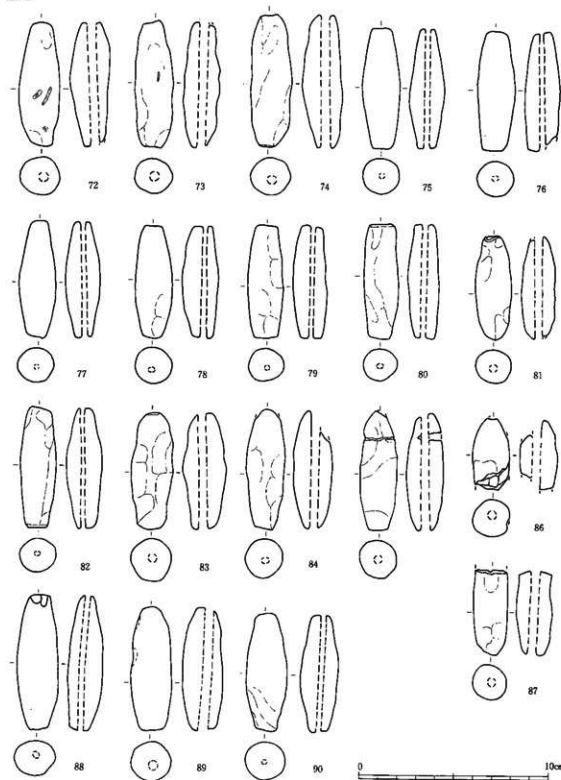
双孔円盤

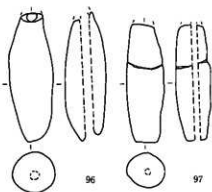
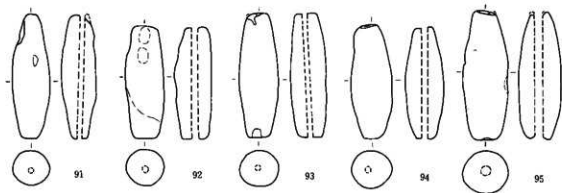


土製模造品

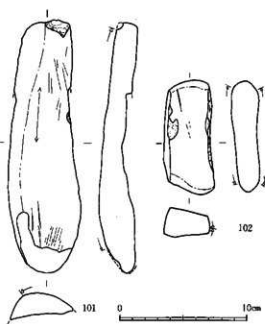
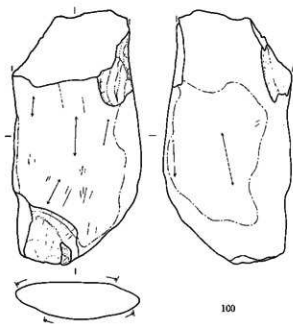
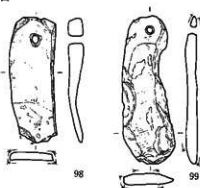


土鏡



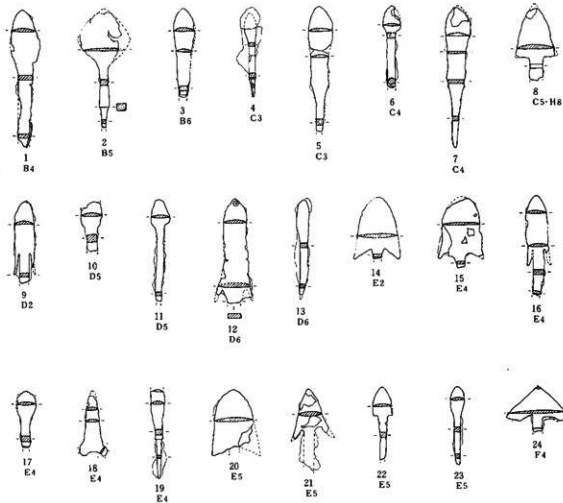


砥石

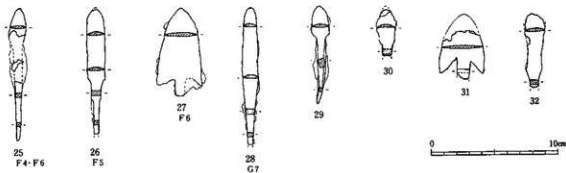


鐵

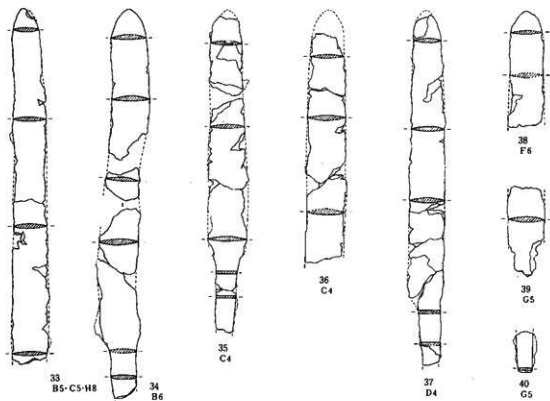
土器集中区 1



土器集中区 5 出土地不明

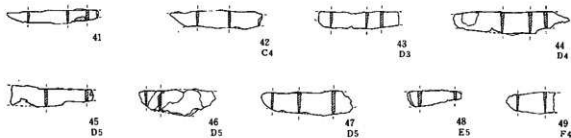


剑
土器集中区 1



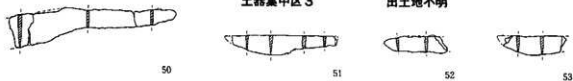
刀子
第 1 号住居址

土器集中区 1



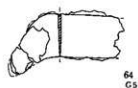
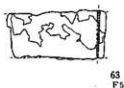
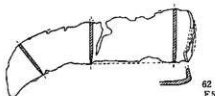
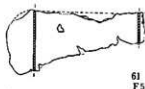
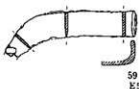
土器集中区 3

出土地不明



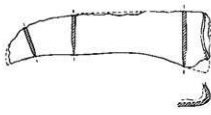
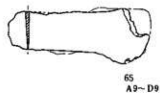
0 10cm

鐵
土器集中区 1



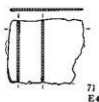
土器集中区 3

第5号土坑

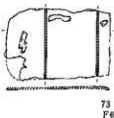


鐵・銅
第3号住居址

不明鉄製品
土器集中区 1



出土地不明



第2表 高宮遺跡古墳時代中期土器分類表

形式	細形式	器形・形態の特徴	成形・調整の特徴	備考	番号
高杯	A	胴が2段成形で、外反する様をもつもの。	口縁、脚端部ヨコナデ。杯部内外面、脚部外面ミガキ。地にハケメを残すものあり。	大小が顕著	1
	B	胴が1段成形で、直線的に外開するもの。	同上	大小が顕著	2
	C	杯部が杯A形を呈するもの。	同上		3
	D	小形高杯、特殊形態など。	同上		4
小形器台		器受部、脚部とも直線的に外開。	器受部内外面、脚部外面ミガキ。		5
杯	A	丸底で口縁端部が外反するもの。	口縁ヨコナデ。底部外面ケズリ後、内外面ミガキ。		6
	B	丸底で口縁端部が外反しないもの。	同上		7
	C	平底気味で深めの体部に僅かな屈曲があるもの。	口縁ヨコナデ。内外面ミガキ。		8
	D	平底のもの。			9
鉢		杯Dの大形のもの。	口縁ヨコナデ。内外面ミガキ。	大小が顕著	10
無頸壺		杯Aより深く、口縁端部が僅かに外反するもの。	口縁ヨコナデ。内外面ミガキ。	杯Aに近縁性	11
短頸壺		無頸壺に似た体部に短く外反する口縁部が付くもの。	口縁ヨコナデ。内外面ミガキ。	杯Aに近縁性	12
直口壺		球形の体部に、直線的に外開する長い口縁部が付く中形のもの。	口縁ヨコナデ。底部外面ケズリ後、口縁内外面・胴部外面ミガキ。		13
小形丸蓋壺		球形、扁平球形または算盤玉形の体部に、直線的に外開する長い口縁部が付く小形のもの。	口縁ヨコナデ。底部外面ケズリ後、口縁内外面・胴部外面ミガキ。地にハケメを残すものあり。ミガキ省略あり。	精製品と非精製品	14
埴		下ぶくれの球形の体部に、内凹気味の長い口縁部が付く中形のもの。	口縁ヨコナデ。底部外面ケズリ後、口縁内外面・胴部外面ミガキ。		15
鉢		球形の体部に、中に腰を持って外開する口縁部が付く中形、小形のもの。体部中央に1孔を有することがある。	同上		16
甕	A	口縁部は中に腰を持って外反。小形・中形の甕。	口縁部は腰を境に2段成形。口縁ヨコナデ。口縁部部の内外面・胴部外面ミガキ。		17
		1	口縁部の上半が屈折。肥厚して上方に立ち上がるもの。中形の甕。	口縁部は屈折部を境に2段成形。口縁ヨコナデ。口縁部部の内外面・胴部外面ミガキ。	18
		2	口縁部の上半が上方にゆるく屈折。肥厚して外開するもの。中形の甕。	口縁部は屈折部を境に2段成形。口縁ヨコナデ。口縁部部の内外面・胴部外面ミガキ。	19
	3	口縁部の上半が「く」の字に屈折。内凹気味に立ち上がるもの。中形・大形の甕。	同上	外来系の甕の可能性	20
	C	口縁部は単純に外開するが、端部が折り返し状になるもの。小形～大形の甕。	口縁折り返し状でヨコナデ。口縁部部の内外面・胴部外面ミガキ。		21
D	口縁部が胴部との境界から単純に外開、外反するもの。中形・大形の甕。	口縁ヨコナデ。口縁部部の内外面・胴部外面ミガキ。		22	
甕	A	口縁部「く」の字に外反。胴部は球形や卵形で底部が丸底のもの。中形の甕。	口縁ヨコナデ。胴部内外面ハケメ・ナデ・工具ナデ。底部はケズリにより丸底化。		23
	B	口縁部「く」の字に外反。胴部は球形で底部が平底のもの。中形の甕。	口縁ヨコナデ。胴部内外面ハケメ・ナデ・工具ナデ。		24
台付壺		短い器台の付く壺。全容不明。			25
小形甕		小形の甕。底部は平底・丸底あり。形態も一定しないもの。	口縁ヨコナデ。胴部内外面ハケメ・ナデ・工具ナデ。	定型化していない	26

第3表 高宮遺跡古墳時代土器実測図 器種・器形対比表

器種・器形	実測図土器番号		
高杯	A	31-90-368-386-468-477-481-484-485-553-555-557-562-602-605-611-613-649-654-659-682-687-703-704-707-708-722-729-731-744-755-781-783-784-786-792-801-805-806-811-824-826-845-864-869-870-882-886-893	
	B	91-132-387-406-478-480-482-483-486-497-563-571-573-576-612-614-618-621-660-667-688-689-691-692-694-697-698-709-710-730-732-733-756-760-793-795-796-810-822-827-830-831-865-892	
	C	459-668-802-821-861	
	D	133-136-138-407	
	不明	9-30-352-367-460-467-548-552-556-603-604-646-648-650-653-690-693-706-714-716-719-721-742-743-780-782-790-791-803-804-818-820-823-855-858-859-862-863-873-874-890	
小形器台	137-408-411-498-572-695-696-761		
杯	A	1-6-349-350-457-458-547-588-590-592-594-596-597-642-644-717-800-854-883	
	B	643	
	C	598-889	
	D	7-8-591-595-645	
鉢	351-599-601-718		
無頸蓋	263-775-785		
短頸蓋	261-264-268-431-436-634-635-678-777-808-835-837-866-868-901		
直口蓋	257-529-581-628-817-849		
小形丸底蓋	139-218-220-223-225-236-412-424-426-430-432-435-499-520-524-525-577-580-582-622-625-627-630-631-669-672-674-677-711-712-734-737-762-773-776-794-797-809-814-815-828-829-832-833-840-843-846-848-852-856-857-860-871-876-878-888-895-898-900-902-903		
埴	219-234-237-256-425-521-523-526-583-619-620-673-778-799		
甌	258-260-262-438-528-584-623-624-629-774-813-899		
壺	A	269-271-275-283-437-440-702-867	
	B	1	270-279-445-713-738
		2	273-274-276-278-280-282-284-290-536-586-632-739-812-838-850-891
		3	291-636-881
	C	285-289-292-439-441-530-535-679-699	
	D	442-444-885	
不明	272-293-314-443-527-531-533-537-587-680-700-705-787-788-884		
罍	A	315-323-327-328-335-337-541-543-545-546-633-741-839	
	B	321-324-326-329-333-334-347-348-449-455-640-641-844-877	
	不明	316-330-332-338-346-450-454-456-538-540-544-637-639-681-701-740-779-789-816-851-853-872-879-880-887-904	
台付罍	344-345		
小形罍	317-320-322-325-339-343-446-534-585-798-807-834-836		
甗	447-448-875-894		

第4表 高宮遺跡古墳時代土器遺構別器種別実測数一覧表

(単位:個体)

遺構名	土器番号	高杯				不明	小形 台	杯				鉢 短頸 盤	鉢 短頸 盤	鉢 短頸 盤	小形 丸底 盤	小形 丸底 盤	小形 丸底 盤	壺				不明	壺		不明	小形 付 壺	小形 壺					
		A	B	C	D			A	B	C	D							A	B	C	D		A	B				C	D	A	B	
																																不明
第1号土器集中区	1~348	348	60	42	5	22	1	6	2	1	6	1	6	1	36	22	4	4	2	10	1	6	2	2	23	7	8	6	2	11		
第2号土器集中区	349~456	108	19	20	1	16	4	2			2		2	1	21	1	1	2	1	2	1	2	2	2	5	5	2	6	1	2		
第3号土器集中区	457~546	90	13	17	1	8	1	2			1		1	2	4	1	1	1	1	1	2	2	5	5	1	2	4	1	1			
第4号土器集中区	547~587	41	9	13		6	1	1			1		1	5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	3	1			
第5号土器集中区	588~641	54	9	7		2		8			1		2	3	2	1	6	2	3	1	1	1	1	1	1	1	2	3	1	1		
第6号土器集中区	642~581	40	7	8		1		2			1		1	1	8	1						1	1	1	1	1	1	1	1	1		
第7号土器集中区	682~702	21	6	7		2	2	2							2	2																
第8号土器集中区	703~713	11	4	2		1		1							4	2																
第9号土器集中区	714~741	28	5	3		6		1							13	1	1															
第10号土器集中区	742~719	38	12	5		2	1	1							2	1	1															
第11号土器集中区	736~731	2	1			1		1																								
第12号土器集中区	732~737	6	3			1		1																								
第13号土器集中区	738~735	2				1		1																								
第14号土器集中区	750~759	10	1	3		2		1							2	1	1															
第15号土器集中区	800~817	18	4	1	1	2		1							1	3	1															
第1号住居址	818~844	27	3	4	1	4		4							2	1	8															
第2号住居址	845~853	9	1			5		1							1	4	3															
第3号住居址	854~868	15	1	1	1	1		1							2	1	4															
第2号土坑	869~872	4	2												1																	
第5号土坑	883~883	2	1												1																	
第7号土坑	873~881	9				2									2																	
第12号土坑	836~837	2	1																													
エツト1	838	1													1																	
エツト13	839	1													1																	
谷口土器櫃	834~835	2													1																	
輸出皿	830~504	15	1	1		1		1							7		1															
(須磨器)	305~506	2																														
合計		906	167	134	5	6	90	16	25	1	2	5	5	3	18	6	210	33	13	8	5	18	9	12	3	37	13	14	32	2	18	4

第5表 石製品観察表 (単位: mm, g)

No	種類	出土地点	長さ	直径	幅	厚さ	高さ	重量	石材	破損状況	備考
1	勾玉	土集1	勾№6	30.75	21.55	10.20	7.95	7.95	滑石	完形	
2	*	*	勾№9	(32.95)	(18.75)	10.01	(8.45)	*	*	下端欠	両面穿孔
3	*	*	勾№5	21.65	13.65	6.10	2.05	*	*	完形	
4	*	*	E5	18.50	12.10	5.00	1.45	*	*	*	S10・E41
5	*	*	*	23.50	14.00	5.40	2.20	*	*	*	
6	*	*	G7	19.00	10.90	4.60	1.45	*	*	*	S12・E39
7	*	*	勾№8	18.90	12.20	4.20	1.30	*	*	*	
8	*	*	*	19.00	12.00	4.50	1.20	*	*	*	
9	*	*	勾№2	14.95	10.05	4.05	(0.75)	滑石	滑石	背部端欠	
10	*	*	勾№10	15.55	9.40	3.05	0.60	玉髓	玉髓	完形	
11	*	*	勾№3	28.60	17.55	7.10	6.25	滑石	滑石	*	
12	*	*	勾№7	23.55	15.15	4.30	2.05	*	*	*	
13	*	*	勾№17	22.00	13.60	5.80	2.60	*	*	*	S10・E40
14	*	*	勾№11	20.90	13.65	4.25	(1.70)	*	*	頸部端欠	
15	*	*	C5	21.50	13.70	3.50	1.20	*	*	完形	S10・E43
16	*	*	E6	25.25	14.20	3.10	1.55	*	*	*	S11・E41
17	*	土集2	*	30.45	18.15	12.05	6.55	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩	*	片面穿孔
18	*	*	*	23.50	13.90	7.10	2.70	滑石	滑石	*	
19	*	*	*	19.00	11.50	5.20	1.50	緑泥片岩	緑泥片岩	*	
20	*	*	*	17.90	11.50	4.70	1.30	*	*	*	
21	*	土集4	勾№1	21.60	13.95	5.65	(2.00)	滑石	滑石	背部端欠	S30・E25、両面穿孔
22	*	*	*	20.60	13.60	4.80	1.60	*	*	完形	
23	*	*	勾№2	25.10	15.40	5.10	3.05	*	*	*	S30・E24
24	*	土集10	*	30.00	19.00	9.40	5.45	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩	*	片面穿孔
25	管玉	土集1	管№1	24.40	4.75	—	0.95	滑石	滑石	*	
26	*	*	管№1	19.15	3.45	—	(0.25)	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩	片側欠	
27	*	*	管№2	15.40	4.10	—	0.45	滑石	滑石	完形	
28	*	*	管№5	22.40	3.65	—	0.30	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩	*	
29	*	*	D5	26.95	4.40	—	(0.45)	*	*	ほぼ完形	S10・E42
30	*	*	F6	24.95	4.40	—	0.85	滑石	滑石	完形	S11・E40
31	*	*	*	(26.25)	(5.00)	—	(0.85)	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩	片側欠	S11・E40
32	*	*	*	18.70	4.60	—	(0.60)	*	*	ほぼ完形	
33	*	*	*	24.70	4.40	—	0.50	*	*	完形	
34	*	土集2	*	25.95	5.55	—	1.40	滑石	滑石	*	
35	*	*	*	(9.00)	(4.10)	—	(0.20)	*	*	片側欠	
36	*	10坑	*	(14.75)	(4.40)	—	(0.40)	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩	*	
37	*	出土地不明	*	24.10	3.80	—	0.35	*	*	完形	
38	丸玉	土集1	*	7.70	7.40	5.30	0.25	*	*	*	
39	算盤玉	*	C4	5.40	5.25	2.80	0.10	滑石	滑石	*	
40	*	*	C5	5.30	5.10	3.10	0.10	*	*	*	
41	*	*	*	5.50	(5.15)	2.45	(0.05)	*	*	ほぼ完形	
42	*	*	*	5.85	5.80	3.20	0.10	緑色凝灰岩	緑色凝灰岩	完形	
54	刻形模造品	*	模№2	(55.80)	17.70	5.10	(7.35)	緑泥片岩	緑泥片岩	下端欠	鍍有り
55	*	*	模№3	54.25	18.65	2.35	3.85	*	*	完形	
56	*	*	模№7	(42.15)	(14.95)	(4.25)	(3.00)	*	*	頸部・下端欠	孔の一部残存・鍍有り
57	*	*	模№8	55.70	19.30	4.60	8.20	砂岩	砂岩	—	未製品?
—	*	*	模№12	30.60	11.25	3.60	1.75	滑石	滑石	完形	鍍有り
58	*	*	№33	35.30	14.30	3.15	2.15	緑泥片岩	緑泥片岩	*	S11・E40、両面穿孔?
59	*	*	C4・5・D4・5	40.40	15.65	5.50	(4.40)	*	*	頸部端欠	S9~11・E42~44、鍍有り
60	*	*	G7	40.75	18.10	5.20	4.65	*	*	完形	S12・E39、鍍有り
61	*	*	C7	(30.35)	14.60	4.10	(2.55)	*	*	下端欠	S12・E43、鍍有り
62	*	*	トレンチ2	21.70	10.08	3.90	1.50	滑石	滑石	完形	破損部を再研磨
63	*	土集2	*	32.80	11.65	2.90	2.15	緑泥片岩	緑泥片岩	*	
64	*	*	*	(32.50)	(11.20)	(3.80)	(1.95)	滑石	滑石	頸~両側欠	鍍有り
65	双孔円盤	土集1	模№1	30.20	30.80	5.90	9.55	石製銅質母片岩	石製銅質母片岩	完形	
66	*	*	模№4	22.90	22.85	4.00	3.55	*	*	*	
67	*	*	模№5	(32.00)	31.25	4.50	(8.55)	*	*	片側欠	
68	*	*	模№6	20.25	(21.10)	3.50	(2.50)	*	*	*	

第6表 ガラス製品観察表 (単位: mm, g)

No	種類	出土地点	色調	長さ	短径	高さ	破損状況	備考
43	小玉	土集1	C4	淡緑色	(5.40)	—	3.85	約1/2欠 気泡散在
44	〃	〃	C7	紺色	5.50	4.90	2.75	完形 表面が一部風化
45	〃	〃	D5	青色	4.30	3.70	3.30	〃 気泡列
46	〃	〃	F5	淡緑色	4.45	4.15	2.20	〃 気泡散在
47	〃	〃	F6	緑色	4.90	4.40	3.85	〃 不透明
48	〃	〃	F7	青緑色	4.60	4.50	3.65	〃 *
—	〃	〃		淡緑色	(4.00)	—	3.10	約1/3欠 E4-6・F4-6・G4-6
49	〃	〃		青色	4.90	4.35	3.50	完形 気泡筋
50	〃	〃		淡青色	2.80	2.75	1.55	〃
51	〃	土集2		青色	5.15	5.00	3.60	〃 気泡列
52	〃	〃		空色	4.30	4.10	1.85	〃 気泡散在
53	〃	2住		青緑色	4.50	4.15	3.80	〃 気泡列

第7表 土製品観察表 (単位: mm, g)

No	種類	出土地点	長さ	幅	厚さ	重量	破損状況	備考
69	勾玉	土集1	No4	31.70	20.45	12.40	6.20	完形
70	鏡	〃		29.75	24.50	17.20	8.50	〃
71	不明土製品	土集2		(26.65)	5.40	—	(1.15)	片側欠
72	土鏝	流路(S24・E12)		(64.60)	20.95	20.50	(23.95)	ほぼ完形 植物質圧痕
73	〃	〃		66.40	20.10	18.50	23.50	完形
74	〃	〃		69.10	20.95	20.80	28.20	〃 植物質圧痕
75	〃	〃		63.30	19.60	18.85	19.75	〃 両端に平坦面
76	〃	〃		62.15	19.40	17.80	(21.30)	片側欠 〃
77	〃	〃		60.80	18.90	18.20	18.20	完形
78	〃	〃		59.10	19.20	18.15	19.80	〃
79	〃	〃		59.55	17.70	17.10	18.60	〃 両端に平坦面
80	〃	〃		60.55	17.85	17.10	18.25	〃
81	〃	〃		54.60	18.20	17.25	15.75	〃 植物質圧痕
82	〃	〃		63.20	19.50	18.45	20.90	〃
83	〃	〃		61.10	22.70	22.40	26.80	〃
84	〃	〃		(62.55)	19.85	19.35	21.60	片側欠
85	〃	〃		61.50	19.65	19.15	(19.20)	〃 植物質圧痕
86	〃	〃		(37.25)	(20.65)	(19.90)	(12.25)	約1/2欠 〃
87	〃	〃		(44.20)	18.90	17.70	(15.50)	〃
88	〃	〃		70.10	20.85	19.35	24.90	完形
89	〃	〃		63.70	21.70	21.15	27.30	〃
90	〃	〃		61.00	20.65	19.55	19.40	〃
91	〃	〃		63.45	19.00	18.40	(18.15)	ほぼ完形
92	〃	〃		58.00	19.65	18.40	20.45	完形 両端に平坦面
93	〃	〃		63.00	19.40	18.50	22.70	〃
94	〃	〃		58.45	21.00	20.05	20.75	〃 植物質圧痕
95	〃	〃		67.40	22.50	21.95	29.10	〃
96	〃	〃		(65.70)	22.70	21.90	27.15	〃 植物質圧痕
97	〃	〃		61.40	19.80	18.55	(19.60)	ほぼ完形 両端に平坦面

第8表 石器観察表 (単位: mm, g)

No	種類	出土地点	長さ	幅	厚さ	重量	石材	破損状況	備考
98	有孔砥石	3住P4	(6.58)	(2.30)	0.70	(16.95)	粘板岩	両端欠	上端に穿孔痕
99	〃	〃	7.70	2.78	0.57	17.10	頁岩	縁辺欠	
100	砥石	〃	No33	(19.80)	(10.10)	(3.29)	(950)	珪質凝灰岩	両側欠
—	〃	〃	No48	(29.00)	(7.54)	(3.50)	(1400)	砂岩	両側欠
101	〃	土集2	No181	19.80	(5.42)	(2.70)	(315)	〃	片側欠
102	〃	土集3		8.86	3.86	2.31	105	凝灰岩	完形

写真図版





流路内土器集中区全景（北西より）



第1号土器集中区（北東より）



第2号土器集中区遺物出土状況



第3号土器集中区遺物出土状況



第4(手前)・5号土器集中区



第5号土器集中区遺物出土状況



第14号土器集中区



第15号土器集中区遺物出土状況



第1号住居址遺物・炭化材出土状況（西より）



第2号住居址（南東より）



第3号住居址遺物出土状況（西より）



合口土器棺





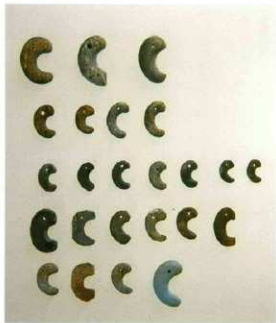




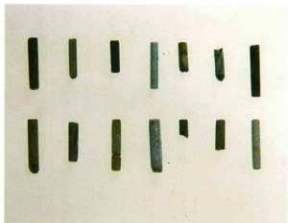








勾玉



管玉



双孔円盤



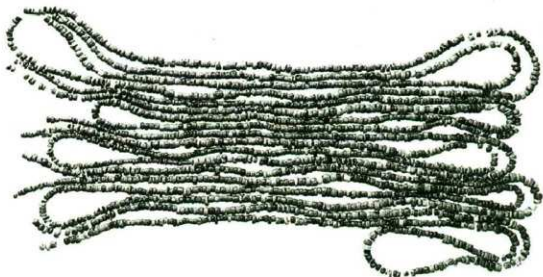
刺形模造品



有孔砾石



假麻



石製白玉



石製白玉 細部



石同左

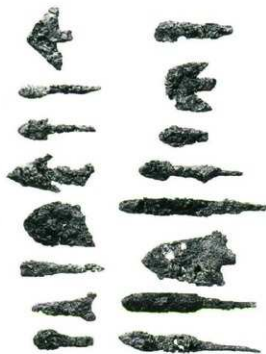
ガラス製小玉



土製模造品



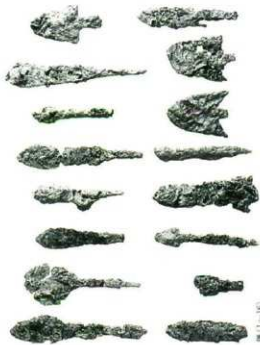
土鏝



圖(17)~(20)



圖(59)~(62)~(65)~(67)



圖(1)~(16)



圖(33)~(40)

高宮遺跡発掘調査報告書抄録

ふりがな	まつもとしたかみやいせききんきゅうはくつちょうきほうこくしょ							
書名	松本市高宮遺跡緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.116							
編著者名	高桑俊雄・直井雅尚・岡沢聡・三村竜一・竹内増長・太田守夫							
編集機関	長野県松本市教育委員会							
所在地	〒390 長野県松本市丸の内3番7号 Ⅲ 0263-34-3000							
発行年月日	平成6(1994)年3月22日 (平成5年度)							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高宮遺跡	長野県松本市 高宮	20202	174	36度 13分 00秒	137度 57分 45秒	19930526 ↓ 19931228	1032.4	高宮・征矢野土地 区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高宮遺跡	祭祀 集落	古墳	土器集中区	15	土器：土師・須恵・弥生 土器	松本市では初の古墳時 代の大規模祭祀遺跡		
			流路	1	土製品：鏡・勾玉・土鏝			
			住居址	3	石製品：勾玉・管玉・白			
			土坑	12	玉・丸玉・算盤			
			ピット	13	玉・剣形標遺品			
			合口土器棺	1	・双孔円板 ガラス製品：ガラス製小 玉			
					石器：有孔砥石・砥石			
					鉄器：鎌・剣・刀子・鎌 ・鏃・鏃			

松本市文化財調査報告 No.116

松本市高宮遺跡

—緊急発掘調査報告書—

平成 6 年 3 月 22 日 印刷

平成 6 年 3 月 22 日 発行

編集 長野県松本市教育委員会

〒390 長野県松本市丸ノ内 3 番 7 号

TEL 0263-34-3000

発行 長野県松本市教育委員会

印刷 精美堂印刷株式会社
